
IS - インフィニット・ストラトス～Innocent Spica～ -

SynSky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS・インフィニット・ストラトス〜Innocent Spirit
ca〜

【Nコード】

N1145T

【作者名】

Synsky

【あらすじ】

臨海学校が始まる初夏……。

新たな代表候補生が転入してきた。

スペイン代表の少女、ギエルミーナ Ⅱ グラナドス。

日本で開発された第四世代プロトタイプISのテストパイロットとしてこの学園にやってきた。

理由も知らないまま織斑千冬に連れてこられた少年、秋篠宮元。

彼もまた第四世代プロトタイプISのテストパイロットに任命される。

ごく普通に過ごすはずであった学園生活にあるトラブルが舞い込ん
でくる。

試作機奪取事件……。

三機ある内の一機が何者かによって施設から奪取される。

残りの二機までもも奪取せんとす謎の組織……、IS学園はこの二機を守り、その奪われた一機を奪還することができるのか。

パロディからシリアスまでが混在する学園生活と変貌していく。

ルミーナによる、お姉様のための、お姉様だけの物語に仕立て上げるが上手く行くかは誰も知らない。

それに巻き込まれるその他大勢の生徒たち……南無。

IS学園の生徒とオリキャラ2名が織りなす、ハイスピード学園ドタバタバトルラブコメ。

担当作者紹介と挨拶（前書き）

最初に作者紹介をします！

担当作者紹介と挨拶

スタッフ一覧

作者名…Synsky

監督・監修…白河シンジ

シナリオ構成…九淨 夕

キャラ設定…白河シンジ・九淨 夕

新型IS設定…白河シンジ・九淨 夕・naono

企画協力…ヨシユア

キャラブレイクカーズ…ヨシユア（頭領）・九淨 夕（筆頭）・naono（参謀）

ツッコミ苦勞人…白河シンジ

作者挨拶

・白河シンジ

初めまして、初のリレーを企画し大きな責任を担ぐことになった白河シンジです。

ISのシャルロットに惹かれて調子に乗ってみました。

はてさて、小説＋リア友との初のコラボ♪ 小説の書き方が異なる二人が未開の一人称表現に挑戦！！

小説仲間からの企画支援もあり無事一つの作品をスタートさせることが出来ました。

可能な限り原作に忠実にをモットーにキャラ設定、IS設定をガチガチやってみました。

一夏をはじめ籌等、お馴染みのキャラもガッツリ登場しますよ。いやはやどこまで行くのやらです（笑）

では、初の試みのため読みにくいわかりにくい等ございますが、ご一読の程お願い致します。

・九淨 夕

日常な情景を書いていくのが割と好きな九淨 夕です！呼ぶときはカタカナ一文字でユー。決してことみの真似ではありませんよ？
好きなキャラはもちろんなのはStSのフェイトの真・ソニックフォーム姿♪

あ、ISの好きなキャラですか？ もちろんラウラー！
はい、冗談は置いといて挨拶します。

この企画は本来はノリでやってみないと言ったところ、シンジさんがノッてきてくださり、ならノリではなく本気でやってみようと思いました。なのでリーダーをシンジさんにしてもらい、自分はシナリオ方面で尽力します。

また、書き方が全く違う作者同士の企画リレー作品。正直言ってますごく楽しみです。

割と設定やシナリオなど本気で考えて書いていますので、楽しんでもらえれば嬉しい限りです。

ヨシユアさんやn a o n a oさんたちの協力があったからこそ実現したこの作品。4人の思惑が交差する物語、私たちが未踏の地に踏み込んでやってみます。応援よろしくお願いします。

・ヨシユア

はいなり、カオス作者のヨシユアですたい（笑
好きなキャラはなんだろうね。とりあえず、なのはではフェイトさん、というか、バルディッシュのジェットザンバーにロマンを感じています。（笑

さて、真面目にいきましょうかね。

今回はシンジさんと夕さんの作品に関わらせていただきました。

僕なんかが関わっていいのかとも思いましたが（笑

担当したのは機体設定や話の構成なんかの大雑把なところを意見させていただきました。

話を聞いている限り、お二方ともに真剣でしたので、面白い作品になるかと思っています。

最後に、お二方のこの作品き関わらせていただいたことに感謝し、終わらせていただきます。

ありがとうございました。

・ n a o n a o

ヒロインでは、のほほんさんが一番好きな n a o n a o です（笑）

うんうん、あの一つ一つの仕草が ああああ！！

っと、これ以上ここで暴走すると、他の作者さんから突っ込まれそうですね（笑）

この度は、シンジさんと九淨さんの I S 二次創作の設定に、自分を関わらせてくれた事に関して、御二人には非常に感謝しております。そして、微力ですが、御二人の役に立てた事が凄くうれしいです＞＜

閑話 プロローグ

くプロローグく

―IS学園敷地内―

「ここはどこなんでしょうか……？ 誰か教えてください……」

私はギィエルミーナ・グラナドス。

仲の良い子はルミーナって呼んでくれます。私的にもお気に入り
の愛称です。

あ、そんなことはいいいですか？

わかりました。いま私は日本に唯一存在するIS操縦者育成学校
“IS学園”に転入することになりました。

ここまで来たのはいいのですがここはどこでしょう？

「はぁ……校門入ったらまっすぐだって言ってくれたのになぁ。全
然正面玄関見えないよ……。うう、転校初日からなんかやだなぁ」

不安指数全開です。

だって初日にこれですよ？ 女の子1人を異国の地に放り出すん
ですよ？

酷いです、絶対一度はぎゃふんって言わせて見せます！

というわけで少し自己紹介しながら歩いてみようと思います。

名前は先ほどもいいましたから以下略です♪

「くっ……まさか奪われるなんて。警備は何をしていたっ！」

「すみません！ 正体不明のISに突如襲われて……2号機が奪取されてしまいました！」

「あれは国家機密だぞ！？ 一体どこでこのISの情報を手に入れたんだ！」

私の周りの技術者さんたちは声を荒げて怒鳴りあってます。

スペインで秘密裏で製造していた第4世代プロトタイプISの情報が漏洩したのか、どこかの国が奪っていったそうです。

製造していた異なるタイプのIS3機の内1機が奪われる。

それは国としても最悪の損失であり、失態です。

「技師長。1機が奪われたとなると、少なくともこの残り2機の存在に気付いてるはずです。これ以上奪われたり、ましてやテストパイロットにまで影響があらると我々、オレハ社の壊滅です」

「う、ぐ……。そうだな、背に腹は変えられん。日本にはIS学園があったな、そこならどこの国も属さない国家で、秘密は守秘される」

「そうですね。それに今、IS学園にはイギリス、ドイツ、フランス、中国など代表候補生の専用機持ちや、あの世界で唯一ISを操れるという男がいます」

「上手くすれば、こちらにも有利に働くか……。よし、ルミーナ！」

「はい？　なんででしょう？」

突如話を振られちゃいました。

そんな難しい話、私あんまり理解できてませんよ？
というかなんで私ここにいるんでしょう？

「ただちに、この“バンデリエーロ・マタドール”をお前の専用機として受理し、日本のIS学園に転入しろ」

「え？　あの学校にですかっ!？」

「そうだ！　あそこにはかのブリュンヒルデが居る。お前が行く目的は2つだ。このISの保護と……………」

―現在に戻る―

というわけですよ。

そんなこんながありまして私は今ここに居るわけです。
最初はうきうきでした。

だって学校に通えるんだもん♪

でも、途中で不安ばかりですよ、道に迷ってるんですもん。

ああ！ 誰か私を……

「もう、私はどこ行ったらいいのおおおおおお！」

助けてください。

私の運命のナイトさんみたいな方、漫画や小説みたいに私を助けて……。

お願いします！

そんなときでした。

私の願いは叶えられました。

「ん？ 初めてみるな。こんなところでどうしたんだ？」

「えっ！？ やつと人と出会えたー！！！」

「ど、どうしたというんだ？ こんなところに人がいるなんて珍しい。もしかして迷ったのか？」

「は、はい。私、今日から転入してきたんですけど……その道に迷

ってしまつて……」

「なるほど、転入生だったのか。それは不安だっただろう。よし、私が案内しよう」

「ほ、ほんとですかっ！？　そのありがとうございます！」

白馬に乗った王子様じゃないけれど。

男の子じゃないけれど。

私はそれでも嬉しかった。

こんな親切な人に会えるなんて……。

そして何より私にはかっこよく思いました、あは♪

「うむ、困ったらお互い様だからな。おっと、そうだ。名を名乗ってなかったな。私は篠ノ之箒。箒で構わないぞ」

「は、はい……！　私はギエールミーナ・グラナドスです。みんなルミーナって私のことを呼びます」

「わかった、ルミーナだな。転入したばかりだと、何かと苦勞するだろう。そんなときは是非私を頼ってくれ。力になる」

どきゅーん！

もうハートを撃ち抜かれました。
やばいです。

超やばいです。

さっきまでの前言撤回です。

白馬の王子様？

そんなの却下です！

もう、こんな人についていきたいです！

お慕いしたいです！

私は決めましたよ。

「はい、箒お姉様！」

箒さんを箒お姉様と呼び、全力を持ってお慕いすることを。

お姉様のためなら火の中、水の中です！

私、ルミーナは箒お姉様のためならなんでもします♪

それが私が初めてであった運命の人。

箒お姉様との出会いでした……。

くプロローグ finく

閑話 プロローグ（後書き）

最初はちよつと心情を多めに取り入れたプロローグにしてみました♪
どうでしょうか？

慣れない1人称作品で、わかりづらいかもかもしれませんが、楽しんで
もらえると思います♪

プロローグ担当…九浄 夕

ルミーナ設定担当…九浄 夕

第一話 ユビキタス少女と試作機（プロトタイプ）（前書き）

とある事情でI S学園へ転校することとなった少女、ギイエルミナ・グラナドス（ルミーナ）と転校の理由がまだ不明な平々凡々な少年、秋篠宮^{あきしのみや}元^{はじめ}。

この二人の転校で波乱の学園生活に更なる波乱が。

臨海学校が近づく中、本格的になってきた実機を使用しての訓練。そんな中、千冬からルミーナ、元にある提案が出される。

提案は異なるものの二人は不安になりながらもそれに従う。

ここから繰り広げられる波瀾に一夏たちはどう対応し行くのか。

第一話 ユビキタス少女と試作機（プロトタイプ）

「では、午前中の授業はこれで終わりますねー」

隣のクラスの副担任である山田真耶先生の声が私の耳に入った。壁一枚隔てているにも関わらず私はその声は何の雑音にも遮られることなく受信できた。

はい、そこ。地獄耳とか言わないでください。

お昼を告げるチャイムが鳴り響いた瞬間、私は自分のクラスの授業を颯爽と抜け出す。

「どこに行くつもりですか、グラナドスさん？」

満面の笑みで私のクラスの担任が彼の有名な電話帳、タ○ン○ージ並みの太さを誇るISの教材を今にも私の頭上に設置されています。言わずもがなその教材は見事私の頭上に有無を言わず落下。

バンッ！！

またこれが強烈に痛いなんの。そうでなくてもそこまで背が高くないのにこれ以上小さくしないで。
ちなみに本日三度目です。

「昼ご飯をいち早く食べたいのはわかりますが、挨拶くらいしてください」

「はい……、すみません」

渋々私は謝り、挨拶をして教室を出た。

その時既に二分も過ぎてしまっていた。たかが二分、されど二分。この二分は私にとって命取りになる。

私は一目散に隣のクラスへと駆けた。

パアアーン!!

「痛っ!!」

「廊下を走るな馬鹿者が」

げっ……、織斑先生。

転校してきてから数週間経つけど、いまだに慣れない一組の担任、織斑千冬先生。

この人もまた人の頭を容赦なく……

「何か言ったかグラナドス？」

「いえ、何もっ!!」

相変わらずこの人の読心術は凄い……。
あつ、そんなことよりも早くしないと。

「良いかグラナドス、お前は代表候補生であると同時に重要な任を与えられていると言うことを自覚しているのか？」

「そ、それはもちろん自覚しています」

「なら良い。今後は気を付けるように」

「はい」

重要な任……。確かに私が今ここに居るのはその任を遂行するためだけど、今はそれどころではないつ。

織斑先生の呪縛……。もとい、話から解放された私はわずか数メートルしか離れていない隣の教室へと入る。

「おっ、ルミーマナ丁度良かった、今からみんなで飯食いに行こうぜ」

私に声をかけてきた“男性”。

織斑一夏。唯一、ISが使える男性としてこのIS学園に在学している男子。そして私の一番の恋敵でもあるんです。

決して一夏さんには負けられないんです！！

「一夏、飯……ってグラナドス。まあ、いつも通りだな」

「おう、元。^{はじめ} お前も一緒に飯食いに行こうぜ」

一夏さんに声を掛けたのは、私と同じタイミングで転校してきたこれまた“男性”の秋篠宮元。

彼もまた男でISが使える希少な人物かと思ってたけど、実際は全くもって素質は“ゼロ”と何でこの学園に居るかも不思議な存在です。

本人が言うには織斑先生に半ば無理やり連れてこられたとか。あの人は一体何をしたいのかわからないです。

「一夏さん、せっかく秋篠宮くんがお昼誘ってきてるんですから、男性は男性同士で食べに行っては？」

「何だよ、別にみんなで食べたって一緒だろ。なあ、元」

「俺に振るな。俺はどっちでもいい。てかグラナドス、どうせ篠ノ之と一緒に……」

だああああ！！

べしっ！！

「痛え、いきなり殴るなよ!!」

「殴られるようなことを言うからですよ!!」

「お前ら相変わらず仲良いよなあ」

「「どこがっ!!」」

まったく……。

超鈍感な一夏さんと異なって察しが良いと言うか、こういう事に
関しては鋭い秋篠宮くん……。対な存在な所為か迂闊に“お姉様”
の話ができない。

それに、秋篠宮くんは悪気はないと思うけど、余計なひと言が多
い……。

男の人ってやっぱりわからないことが多いような少ないような。

「一夏、いつまで待たせ……っ、ルミーナ!？」

「箒お姉様あゝ♪ 待っててくれたんですね」

流石お姉様、こんな私を待っててくれた。

えっ? 待ってたのは私じゃない? 何のことですかあ、私には

くルミーナ、いつまで待たせるつもりだ>※脳内再生です

と聞こえましたが、何か?

「こら、腕にしがみ付くな!! それといつも言っているが同級生
だろっ!!」 と言うよりもお姉様はよせ」

「良いじゃないですか、私が呼びたいんですから、それより待たせて
ごめんなさい」

「いや、特にお前を待っていたと言う訳では……」

「食堂に行きましょうっ!!」

「なっ、オイこらルミーナ、私は一夏を……」

「レッツゴー♪」

「一夏ああアア!!」

先手必勝、一夏さんにお姉様を渡すわけにはいかない!!
お昼くらい一緒に居させなさいってものよね。
とにかく、まずは席を確保して一緒にメニューを頼むだけえ。
見事私は一夏さんの手からお姉様を奪うことに成功した。

「あの二人も何だかんだで仲良いよな」

「お前ホント鈍感だなオイ」

「ん? 何か言ったか」

「いや……、てか俺たちも食堂行こうぜ」

ひとまず一同は昼食を済ますべく食堂へと向かった。

△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

―食堂―

食堂に来たのは良いけど相変わらずこの空間に入る時は躊躇いが出てくる。

別に女性が苦手と言う訳ではない。むしろ好きだ、男なんだからな。

とは言うもののホントに見渡す限り女性と言うのはやはり慣れないものだ。

「なあ、元。お前今日何食べる？」

「えっ？ ああ、いつも通り日替わりのつもり」

「確かに栄養バランスは良いけど、たまには違うものも頼めば良いのに」

「日替わりも内容変わるんだから問題ないだろ」

まあ、まだ一夏が居るだけマシではある。

逆に一夏も俺が転校してきてからは色んな意味で肩の荷が下りたのか、通常の1・3倍ほどテンションが高い。

以前、男が転校してきたことがあったらしいが、詳細を聞くと同じクラスのデュノアが、諸事情により男装して過ごしていたのかなとか。

てかどう見てもデュノアは……

「元？ 何かよからぬことを想像してない？」

「うお！？ デュノア、驚かすなよ」

「驚かすなって、元がボクの事をジロジロ見てたから」

「まて、誤解を招く言い方はヤメレ」

「おお、シャルロット。今日は同じメニューだな」

「あつ、ホントだね一夏。おいしそうだから選んだんだ」

「その選択は間違いないぜシャル」

気づけ一夏。

和食を選ぶことに異論はない。だがどう見てもデュノアが好き好んで選べる食材ではないぞ。

ひじき、おくら、生たまご、具沢山味噌汁、麦ごはん……その他もろもろ。どこぞの朝ごはんだ。

唐変木と言われても仕様がな^い一夏にはそんな能力は皆無だな。

「一夏あゝ、早くしなさいよ」

「お食事が冷めてしまいますわ」

転校してから毎度思うが、唐変木っぷりを知っている凰とオルコツトも諦めないところが凄い。

俺は話を聞いただけで、あいつ自身の今までの経歴を知らないがよほど凄いことをやり遂げたか。

「悪い、悪い……あれ？ 箒とルミーナは？」

「向こうで鬼ごっこしてたわよ」

「は？ 鬼ごっこ……？」

懲りないやつだグラナドスも。

篠ノ之も大変だな同性からの猛攻と唐変木からの偏屈発言……。

「そう言えば前々から聞こうと思ったんだけど、元ってIS動かせないよね？」

「それがどうかしたか」

「何でこの学園に居るのかずっと気になってんのよ。あとルミーナもスペインの代表候補生なのに授業中は訓練用のIS使ってるし」

俺に聞くな。

俺だって未だ聞かされてないんだからなここにいきなり転校させられた理由。

グラナドスが来た理由も、ISの事も全くもって知らない。

「グラナドスの件は知らないけど、俺がここに居る理由は至極簡単だ」

「へえ、気になるなあ。僕も理由聞きたいよ」

「そうですわね。クラスメイトとして知る権利がありますわ」

「なら、私も聞く必要があるな」

さて、何か増えたぞ。

「ボーデヴィツヒ！？ 急に湧いて出てくるなよ」

「貴様、私をカビみたく言うな」

「わかったからその手に持っている物騒なものを片付けてくれ」

「人気者だな元」

一度こいつを殴っていいですか？
まあ、いつもの事だから気にしないようにしよう。

「何の話してるんですか？」

「あっ、ルミーナ。箒との鬼ごっこ終わったんだ」

「もちのろん♪ 逃さないよ」

やっぱりこの学園はわからんな。

とりあえず俺は、ここに転校してきたその至極簡単な理由を伝える。まあ、言わずもがな反応は見事全員「へえ」だ。

唯一、グラナドスだけが口を挟んできた。

「実際にIS動かしたことも無いんだっけ？」

「素質がない時点で動かすも何もないと思うが」

「ふうん。織斑先生も何があって連れてきたんだろう」

「一夏は何か知らないのか？」

「何度か聞いたことあるけど、いつもお前が気にすることじゃないって切り返される」

謎だ……。

ISの事自体が謎なのに、それを起動できない俺がここに居ると自体も謎だ。

そんなことを考えたところで俺の学園生活が変わることはない。一般教養は普通に受けれるから、無理やりの転校ではあるけどそこまで悪いものでもない。

ポジティブにことを考えれば意外に乗り越えられるものだ。

「お前らはいつまで食事に時間をかけるつもりだ。午後からの実習訓練は実機を使用しての訓練だと伝えたはずだ。間に合わなかったらわかっていると思うが、アリーナ10週忘れるなよ」

IS操縦者は大変だなと他人事のように話を聞き流していたら、織斑先生が睨むように俺に視線を向けてきている。

何かしましたかと聞き返そうとしたがそれは不要だった。

向こうからこっちにヒールをカツカツ鳴らしながら近づいてきた。

「秋篠宮、今日はお前もアリーナに來い」

「へっ?」

「何を呆けた表情をしている。今日の訓練に“お前”も参加しろと言っている。二度は言わんぞ」

織斑先生は今なんと言った?

何度も脳内で台詞をリピートさせたが同じ言葉しか繰り返されない。

今日の訓練に俺も参加する……。
改めて言うておく、俺はISの適性はほぼ皆無に等しい。

「わかったなら返事をしないか、馬鹿者が」

「は、はい!!」

俺の訓練参加は半ば強制的に決定した。

△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

―女子更衣室―

一気にご飯食べたからやや横腹が痛い……。
でも私の楽しみな時間が来たからそんなことは気にしない。
だって午後は一、二組合同の実習訓練。ましてや実機を使つての
訓練となると専用機持ちの人は一般生徒の支援に回ることがほとん
どで、上手く行けば箒お姉様と一緒に操縦の説明を受けれる。
訓練に参加するだけで一緒に居れてかつ、会話もできる。一石二
鳥とはこのことを言うんですね。また一つ日本語を覚えることが出
来ました。

「うふ、うふふふ……」

「……ルミーナ？ 何を一人で笑っているんだ」

「はっ、い、いえ何でもないですよお」

「そ、そうか。急がないと織斑先生からまた叱責を受けるぞ」

「そうですね、急ぎましょう!!」

流石に織斑先生の授業に遅れる訳にはいかない。

あの先生はあの強力な出席簿（の角）で叩くだけじゃ飽き足らずアリーナを走らせるとある意味体罰に近いことを本当にするから厄介極まりない……。

と心の中で思っているにも感づかれることが多いから今は余計なことを考えずアリーナに急ぐことだけを考えよう。

―第三アリーナ―

「全員遅れず集まれたようだな」

全員がホッと胸を撫で下ろそうとしたが、そんなことはこの先生がさせてくれるはずもなかった。

「だが、準備に時間がかかり過ぎだ。訓練機は予め貸出許可を出している。五分前には準備を完了している、いいな？」

返す言葉がない……。

確かに先生の言う通り今日は訓練機を使つての訓練であることは事前にわかつており、貸出許可も出ている。それに最近は出来るだけ訓練機に触れての実習が増えてきている。

「早速専用機持ちは各グループに着き、いつも通り『展開』『移動』『解除』の基本動作を順に終わらせろ。その後は予定通り実戦を踏まえた演習を行う。では開始しろ」

織斑先生の開始の合図と共に私は一目散に箒お姉様の元へと向かうとした。その矢先だった。

「おい、グラナドス」と先ほど話し終えたはずの織斑先生が狙ったかのように私の名前を呼んだ。

嫌な顔を見ると絶対に、「何だその顔は」とか言ってあの出席簿で殴られかねないからここは普通に対応しないと。

と振り返ってみたが、逆にその普通に対応しようとしてかえって表情が硬くなってしまうていたのは、出席簿が見事私の頭を直撃してからだった。

誰かあの先生の脅威から逃れられる術を教えてください（泣）

「で、織斑先生何ですか？」

「この状況下で呼ばれたならわかるだろ」

こんな状況で呼ばれたならあれしかないだろうなと思っていたら案の定の言葉が織斑先生から発せられた。

「あまり公に出せるものでないことは百も承知だが、お前もそろそろ打鉄^{うちがね}“では”やりづらいだろ」

「確かにそうですけど、良いんでしょうか学園内部とはいえ“試作機”を使用するのは」

「百パーセント大丈夫だとは言えないが、学園^{うち}には既に一機、第四世代型が周りを気にせず稼働しているからな」

「それはそれで話が違うような気もしますが……。先生が大丈夫と言うのであれば準備してきます」

「ああ、責任は私が取る。^{フオーマット}初期化と最適化は問題ないと思うが、^{フィッティング}向こうのデッキで慣らしておけ。時間になったら呼ぶ」

わかりました。と私は答え、お姉様を背にデッキへと向かう。それにしても久しぶりに使うなあ。前に使ったのってスペインに居るころだから2ヶ月くらい前？ まあ打鉄よりは使い慣れてるから楽にはなると思うけど。

ただ織斑先生が言うように私の試作機は簡単に公に出せるものではないのは確か……。

複雑な心境の中、私は首に提げたシルバーチェーンに手を掛けた。

グラナドスが一人デッキに向かったのを見ていた俺はただ一人た

たずんでいた。

たたずんでいる理由は至極簡単。ISスーツを着たままウンともスンとも言わない鉄の塊を目の前に行っているからだ。

「俺にこれをどうしろって言うんだ」

とそこに白式だったか、それを装着した一夏がたたずむ俺を見て不安そうな表情を向けてきた。

不安まみれだよ。これで織斑先生から早く展開させろなんて言われたら、俺本当に一夏^{いっしょ}を殴ってしまいたいそうだ。

「元、やっぱり無理そうか？」

「見てわかるだろ。前にお前が教えてくれたようにやってみただけ全くだ」

「織斑、秋篠宮」

言ってるそばから織斑先生登場だ。

これは出席簿クラッシュ（俺が勝手に命名）を覚悟するしかないか。

と思ったが特に何もしいまま打鉄に手を当て起動させた。

「やはりまだ無理か……」

「そうりゃそうですよ」

「秋篠宮、一度でいいこのまま打鉄を装着してみろ」

この人はホント無理と言うか無茶なことを言う人だ。
何となくだが織斑先生が俺をここに連れてきた理由がわかった気がする……。

けど、根本的なところが未だにわからない。

「あの……」

「何だ？」

「装着ってこれで良かったですか？」

言われるがままに装着（？）してみたが、他の女子たちが装着しているのとは何やら異なる。
レッグパーツはこれであって……よな。アームパーツが一夏たちみたいにしっくりこない。

「うむ……、装着できただけ良い方か」

「で、これをどうすれば」

「いや、今日はこれで十分だ。すまなかった無理強いさせて」

本当に俺はこの場に居ていいのだろうか。改めて一般教養以外で俺のここでの存在意義が……。

こればかりはプラス思考にできない事象だな。

「秋篠宮、とりあえず今日はこの後の模擬戦を見学して一つだけでも良い、何か気づきを見つけろ」

「は、はい」

△▽△▽△▽△▽△▽△▽△▽

―第三デッキ―

「よし、これでいいかな？」

私は一人、ここ第三デッキで普段使用している打鉄ではなく“私のISを展開して装着を行う。
フォーマット フィットテイング こつち

初期化と最適化は日本に来る前に済ませてあるから後はちゃんと動くかどうか。

けど、少しの間動かしてないだけで馴染みが……。大丈夫かな。

「まあ、下手なことしない限りは私の言うことは聞いてくれるし心配ないかな」

一人で納得させるように呟いてるさなかに通信が入った。
声を聞く限りでは織斑先生ではない。この声は山田先生だ。

『グラナドスさん、そろそろ時間ですけど準備は万端ですかあ?』

「はい、一応展開までは完了してます」

『へえ、それが噂の“試作機”ですかあ。初めて見ますけど、見た目は第三世代型と変わらないんですね』

「あれ? 山田先生見るの初めてでしたっけ?」

『そうですよ。学園に来た際は立ち会えてないですからね』

『準備は整ったか、グラナドス?』

はて? 山田先生とは異なる声が。

ってこの声織斑先生だ!?

思わず私は「はいっ!!」って答えてしまった。

『織斑先生っ!?!?』

『アリーナでは既に準備完了している。後はお前だけだが調整の方はどうだ?』

「はい、何とか展開まで完了して最終調整もあと少しで終わります」

私は急いで最終調整に取り掛かる。

微調整は訓練中に行うとして、出だしのところだけはちゃんとしておかないと。

てかアリーナ側の調整って、模擬戦する気満々。

模擬戦の相手って誰だろう？ んー実機訓練だしなあ……はっ、

もしかして箒お姉様！？

お姉様との模擬戦……お姉様との模擬戦……。

『言っとくが、模擬戦の相手は織斑だ。基本的には専用機持ちと同等の扱いで行うからな』

「一夏さんですか……」

『不服か？』

「い、いえ！？ そんなことは……ない……です」

やっぱり試作機とはいえ専用機の位置づけになるから仕方ないか。それに見た目は第三世代型でも中身は……ね。

『よし、微調整は模擬選中に行え。安心しろ、織斑もまだ白式をしっかりと扱えてる訳ではないからな』

「わかりました。今から出ます」

『とりあえずは慣らし程度で構わない、まずは自分のやりたいようにやってみろ』

「はい!!」

自分のやりたいようにやる。

もちろん端からそのつもりだったけど、織斑先生からも許可が下りた。

お姉様に良いところを見せるチャンスだし、それに一夏さんをここで張りたお……ゲフンゲフン、もとい試作機のテストにもなるから頑張らないと。

「それじゃ、行こうか《バンデリリエーロ》」

カタパルトデッキから私は一気にアリーナに向けて飛び出した。
目標は……織斑一夏とそのIS、白式!!

―第三アリーナ―

「あの、織斑先生？」

「何だ？」

「ルミーナと模擬戦するのは良いんですけど、専用機と訓練機の組み合わせに問題……」

「問題があるとしても言いたいのか？　なら聞こう織斑。お前は一度でも訓練機と模擬戦をして勝てたか？　それとも何だ、自分は訓練機程度なら造作もないと？」

「いや、そんなことは思ってないです。むしろ訓練機との模擬戦の方がありがたいです」

はあ、下手なことは言わない方が良いなやっぱり。

でも何でまたルミーナとの模擬戦なんだ？

打鉄使ったの模擬戦ならルミーナじゃなくても良いような気がするけど。

確かにルミーナが訓練機使ってるメンバーの中では操縦レベルが高いつて聞くん。それにスペインの代表候補生でもあるからか。それなら合点がいく。

そう思った矢先に千冬姉えから想定外の一言が発せられた。

「先に言っておく、グラナドスは今日訓練機は使用しない」

「へっ？　今なんて」

「今日はグラナドスの専用機と模擬戦をしてもらう」

専用機？　ルミーナ用の？

その時、第三デッキから一機のISが飛び出してきた。

そして俺のハイパーセンサーに映ったのは確かにルミーナだった。しかし、ルミーナが装着しているISは打鉄とは全く異なる形状の

ISだ。

見た目は第三世代型と似たような形状であるがどこか俺の白式に近いものも感じた。

ただそれが何なのかがわからない。

そんな中、ルミーナの機体情報が表示された。

「G C A — P O 1 ? 機体名はバンデリリエーロ・マタドール……
えっ……何だよこれ」

俺はその情報を見ていろんな意味で驚いた。

ルミーナが専用機を持っていたこと自体は代表候補生であればその可能性は高いためあまり驚きはしなかったが、ここに表示された情報は確実に俺じゃなくても驚く。

何たってそこに表示されていた内容は……。

「気づいたか、織斑」

千冬姉えはその情報を知っているようだ。

そしてルミーナの機体を見てアリーナに居る全員にその情報を伝えた。

「あれは、“第四世代型プロトタイプ”だ」

（第一話 ユビキタス少女と試作機^{プロトタイプ} f i n ）

第一話 ユビキタス少女と試作機（プロトタイプ）（後書き）

初めましてでこんにちは。

こちらではお初の出陣となります。

当サイトで活動しております白河シンジです。

そしてIS専用の作者名「Synsky」の名付け親です（笑）

まあ、自己紹介をうpしてるので程々にしましょう。

さて、第一話いかがでしたでしょうか？

オリジナルキャラ「ギエルミーナ・グラナドス」と「秋篠宮元」自由奔放なルミーナに、気苦労の多い元。

そんな彼女らが常日頃からハチャメチャなIS学園に潜入させてみました。

一話ですのでまずは人物をメインにしたお話です。

とは言うものの、今回のISは戦闘よりも日常の方がやや多めな構成になっていますので戦闘好きな方には少し物足りない部分があるかもしれません。

では短いですが第二話担当の夕さんにパスしますかね。

ちなみに第二話の内容は夕さんしか知らないので予告はなしです（笑）

第二話の内容を想定しながら第三話の構想を練らねば。

では次回に会いましょう。

第二話 可憐なる闘牛ーバンデリリエーロ・マタドールー (前書き)

第二話担当の九浄 夕です。

いきなり見せ場の戦闘シーンだけに頑張って書いてみました。

一人称の戦闘描写難しいです。

それでは遅くなりました。

楽しんでもらえれば幸いです♪

第二話 可憐なる闘牛―バンデリエーロ・マタドール―

「第四世代プロトタイプだど？」

「ありえせんわ。各国でやっと第三世代の量産目途が立っただけなんです」

「一夏！ それは見間違いじゃないでしょうねっ！」

鈴の通信が俺に届いてくる。

間違いない、確かに白式のディスプレイには映っている。

第四世代プロトタイプ機と……。

俺はルミーナの機体に再度目を向ける。

煌めく紅の色を圧倒的な存在感で主張する深紅の機体“バンデリエーロ・マタドール”。

特徴的な背部に展開する四枚羽根のウイング・アーマー。まるで天使の羽のように錯覚させられる。

「シャルロット」

「なに？ ラウラ？」

「お前はルミーナの何をどう考える？」

「……正直言うならわからない、かな」



「うん、ハイパーセンサー良好。スラスター部オールグリーン。武装は……うん、問題ない」

久々に触る私の愛機“バンデリリエーロ・マタドール”。
ちゃんと言うことも聞いてくれる。

そして初めての実戦だね。あなたと。

相手は敵にとって不足なし。

私の最大のライバル……。

そして最大の宿敵、お姉様と私の愛の最大の障壁！

「箒お姉様、見ていてくださいね。私が一夏さんを倒してお姉様の全てを……っ！ はっ！？ お姉様の全て？ それってもしかしてベッドインでお姉様を……」

ルミーナ、お前に私の全てをやろう。好きにするがいいさ。

注※これはルミーナの妄想です。

「やばいです！ テンション上がってきました！ とつと一夏さ

んを潰して……こほん、消して箒お姉様と甘い一夜を過ごします!」

(ルミーナ、準備はいいか?)

「えへへ〜箒お姉様♪ はっ、待って。もしここで私がかつこよく勝ったみたら?」

私は弱い男なぞいらん。ルミーナ、お前のような強いやつこそが私のモノだ……。

注※またまたルミーナも暴走妄想です。

「くちゅん。うう、なんだ? さっきから物凄い寒気が」

「大丈夫なの? 箒。風邪?」

「い、いや。問題ない。すまない」

(ルミーナ、よほどしごかれないようだな?)

「はっ!? だ、大丈夫です! いつでも行けます!」

この後しごかれたらお姉様と一緒にの時間がなくなるじゃないですか。

そんなことになったら私の計画が一瞬でなくなるんですから。

（ルミーナ、さっきからどうしたんだ？ 大丈夫か？）

そんなとき何故か私と箒お姉様の敵である一夏さんがプライベート・個人間秘匿
チャネル通信が来た。

「大丈夫です、一夏さん。それより、そんな余裕かましていてよろしいんですか？」

（余裕なんてかましていないさ。ルミーナが何かいつもと調子が違うから心配になって）

出ました。女を落とす天然口説きですな。

これで私のお姉様が……毒牙につ！

「本気でかかってきてください。私の“バンデリリエーロ・マタドール”に一瞬で落とされないように」

ここで私は挑発しておきましょう。

「なら、行くぜ。ルミーナ」

「来なさい、近づけるものなら」

――警告、敵IS攻撃体勢に移行。初弾エネルギー装填。
次の警告が俺の白式に情報が流れる。

「箒お姉様は私のものです!」

キューインツ! という耳をつんざくような独特の音。
それと同時に俺の側方から閃光が一条。
気付いた瞬間、俺の体を撃ちぬいた。

「うおっ!?!」

白式のオートガードが俺を守ってくれた。
だが、直撃だった。

何か吹っ飛ばされるような感覚、そして神経情報として全身に痛みが走った。

瞬時に体勢を崩した白式は自動姿勢制御を行う。
さらにブラックアウト防止があるため気絶はしなくてすむ。
だが……

――バリアー貫通。ダメージ50。シールドエネルギー残量517。

実体ダメージレベル低。

（一体どこからっ！？ 何が起きたんだ……？）

ルミーナは機体をさきほどと同じ位置に浮遊して止まっている。
動いた気配もなにもない。

こんな多角的な攻撃を出来るのは……？

「いつまでばおーっとしているのですか？」

ドンッ！ と今度は後方から衝撃を感じた。

またシールドエネルギーが削られる。

さっきから何が起きているんだ？

何度も何度も衝撃を受け、ダメージが蓄積されていく。

これじゃ……あのときのセシリアみたいな……。

「ん？ 待てよ……？ そうか、わかったぜ。この攻撃の正体が！」

「あら？」

俺は雪片式型を展開する。

そして神経を集中する。

白式のセンサーを信じろ……。

感じれるはずだ。

刹那、わずかな音が一夏の耳に届いた。

「はあっ！」

音がした方向に迷いなく雪片式型で斬る。

刹那、そこで光が拡散した。

俺の右方向から飛んできたレーザーだったのだ。

「やはりな。こんな多角的な攻撃が出来る武装って言ったら、セシリアのブルー・ティアーズと似たビットだろ？」

俺は周囲を見た。

俺を囲むように展開されている4基のビット。

それぞれ全ての砲門が白式に向いてる。

「わかったとしても逃げられなくちゃ意味はないですよ？」

4基のビットが不規則に動き、不規則なリズムでレーザーを放出し、攻撃してくる。

俺は必死に動きながらも回避していくが、この攻撃の雨から逃げられない。

くそっ、やられた……。

けどな！

「そいつの弱点は知っているっ！」

ずっとその場にとどまっているのだからな。

おそらくルミーナのこの攻撃もセリアと似ている。

なら、この攻撃を使われている間は他のことが出来ないだろ？

俺はそこでこれを使う。

イグニッション・ブースト

“瞬時加速”

一瞬で最高速度を出せる上級技術。

そこでいっきに間合いへと入り込み、俺は雪片式型を振りおろした。



「なっ……！？」

いきなり、私の前に現れる一夏さん。

イグニッション・ブースト

瞬時加速。実際に“視て”みると想像以上に早いわね。

そのまま刀を振り下ろすですか、正解ですよ。

中距離型のISに対しては……！

ですけど、それがあなたの敗因です。

誘導されたその時点です。

「一夏さん、良いものを見せてくれたお礼です。あなたも味わって

みますか？」

一夏さんは私に刀を振り下ろしました。
だけど、その軌道上に私はいません。

— イグニッション・ブースト
— 瞬時加速 —

「まさかっ!？」

一夏さんの攻撃は空振りに終わりました。
当然そこは隙です。
そして……。

「一夏さん、私のエストカーダ・マタドールはイギリスのブルー・
ティアーズと一緒にありません。だってこれは……」

無線分離式統合制御高速機動兵装システム (Separate
integration high-speed control
mobility system)。
通称、SHCMSシステムシクムスが搭載された全範囲多角的武装ですオールレンジマルチレイドか
ら。

ブルー・ティアーズを超えた武装。

「それがエストカード・マタドール。私のバンデリリエーロ・マタドールの名を冠するメイン武装です」

止まった一夏を横から4基のビットによる一斉砲撃。
ダンッダンッダンッ！ と音が響く。

「くう……っ！！」

一夏さんは私に特攻をかけてきました。
さすがにこれには驚きですが。

そこに対向線に私はビットを展開。
これで終わりです。
レーザーを放ちます。

「これで閉幕としましょう」

「まだ終わらなねえ！」

イグニッション・ブースト
瞬時加速。

さらにビットに向けての超加速。
まるで無謀に突進してくる一夏さん。
そこに私は一瞬恐怖を見てしまった。
それがダメでした。

「はぁぁぁぁ！」

一閃！

瞬時加速をしながらのダッシュスラッシュ。
4基のうちの1基が一刀両断されました。

「なっ！？ だけど……そんな直線的に！」

私はエストカード・マタドール（以下EMと称す）に起動指令を送る。

何か嫌な予感がします。

指令を受けたEMが白式に襲い掛かっていく。

だったらこれで終わりにしましょう。

一斉射撃。

ビットが一瞬止まり、レーザーを放射。

その瞬間でした。

「それを待っていたぜ！ ビットがレーザーを放つ瞬間一瞬だが止まるところを！」

（見抜かれたっ！？ EMの弱点を？）

一夏さんは3基のビットを動きながら近くにある順番で落として
いきました。

爆発。

全てのビットが切断されてしまいました。

「これで全基破壊したな。追い詰めたぜ、ルミーナ」



「凄いですね、織斑くん。グラナドスさんの新型の武装を攻略しました」

「……………」

「?? どうしました? 織斑先生?」

「山田先生。妙に思いませんか?」

「何ですか?」

「グラナドスのさきほど見せたイグニッション・ブーストのことだ」

絶対当たる。そんな攻撃だったが……。
一夏さんは避けたのだ。

「あ、あぶねえ……。セシリアんときみたく最後まで油断なんてできないからな。注意しててよかったぜ。それより……。これはレーザーナイフ？」

「凄いですね、一夏さん。さすが私とお姉様の有意義で甘い一時を邪魔できる男です。……はい、放出型でなく固定型です」

レーザー放出系のビットにレーザー固定系のビット。

これがエストカード・マタドールの姿です。

ですが、さすがですね。

最後の一撃を避けられるなんて思いませんでした。

「ですがこれで終わりです！」

2基のレーザーナイフビットで一夏さんをさらに追い詰めます。

だけど、さすがというべきなのか、シャルさんやラウラさんに指導してもらってるみたいで……。

操作とスラスターの使い方が上手い。

だけど……！

「私はこの模擬戦勝たなくちゃいけません！」

(注※翻訳…お姉様とゴールインするために必要な過程だからここで強く見せておきたい)

「ルミーナ……。そこまで本気だったのか」

一夏さんは避けながらさっきのビットみたいに雪片式型で切り裂いて破壊しようとしています。

けどそんなことはさせません。

ここで……。

「このビットもらった!」

「渡しません」

一夏さんの攻撃が当たる瞬間。
そこを待ってました!

「はぁぁぁぁ!」

刀とビットが接触する瞬間。
私はその場からビットを消した。

「逆にもりました！ 一夏さん！」

消えたビットを私のISの腕に再構築。

そのまま小型近接武器に転用させてもらいます。

「ラビットスイッチ高速切替にラウラの近接技だって!？」

一夏さんはさすがに驚いているみたいです。

私だって仮にでも代表候補生ですよ？

他人の技を盗むくらい簡単ですから。

さすがに本家よりは劣りますが。



「あの近接、ラウラにそっくりじゃない！」

「それにシャルロットのラビットスイッチ高速切替か。ルミーナ、どこでそんなのを

……」

「恐らく私たちの戦闘を見て模倣コピーしたのだろう」

「つまりそれって僕たちの戦闘スタイルを全部使うってことだね」

「ルミーナさん、代表候補生だからそれなりの実力はあると思っていましたけど……訓練のときはそれほど突出して凄いとは思いませんでしたわ」

アリーナでは鈴、箒、ラウラ、シャル、セシリアが戦闘状態を分析している。

ルミーナに関しては予想外ではあったみたいだが。
かくいう俺もこの実力は驚きなんだが。

「グラナドス、普段あんなだったのにそんなに操縦上手いのかよ」

けどなんだ？

あの機体に俺は何かを感じる。

「なんなんだ？ この感じは？」

「元さん、どうかなさいまして？」

「あ？ いや、なんでもない。それよりグラナドスってあんなに出来るやつだったのか？」

俺は途中まで聞いていた話を振っておく。
どうせさっきの感じは気のせいだろうしな。

「いえ、わたくしも知りませんでしたわ。訓練機を使用するほかのみなさんよりは操作レベルは高いとは思っていましたがこれほどとは……」

「私も知らなかったが、いままでのルミーナを見てると何か違和感があったな」

「何か手を抜いてる感じ、でしょ？」

「デュノア？ あいつが手を抜いている？」

さすがにそれは驚くぜ。

あのいつも篠ノ之を追っかけてるグラナドスの奴が……。

まあスペインの代表候補生になるくらいなんだからレベルは高いのはわかるが。

この模擬戦みてるだけでもルミーナのやつの実力、一夏より高いんじゃないか。

「うん、実際に手は抜いてはないと思うよ。だってそれなら織斑先生が気づくはずだし」

「そりゃそうだ」

「だとすると、ムラがあるんじゃないかな？ 多分ルミーナ自身の操作技術とかラウラと同等だと思う」

「私もそう思う。だが、それを出せない。となるとムラがあるんだろう」

よくそんなんわかるな……。

だけど確かにそうだ。

グラナドスはいつも全力を出し切れていない感じだった。

だけどそんなのはいつも気づかせない。

だとしたら、この模擬戦の組み合わせに何か意味があるんじゃないか？

「なるほどね。そう考えるといまのルミーナは相当厄介ね。完全に自分のペースで戦っているんだから」



「くうっ……」

一夏さんを追い詰めている。
行ける。

今日はなんだか調子がいい。
バンデリリエーロが応えてくれる。
私の動きに、想いに。

「だけど……これ以上長期戦は無理みたいね。エネルギーがもう少ない……ほんとエネルギー効率が悪すぎる点を省けば最高の機体なのに」

あまり一夏さんの攻撃はくらわなかった。
けど度重なる攻撃の回避やEMの駆動によって想像以上にエネルギー消費が早かったのは痛い。
忘れていました。

「だったら……一夏さん。これで終わりにしましょう」

私は目の動きでとあるシステム起動プログラムを取り出します

ワンサイズ・アビリティ
――単一合成能力使用権限。リリース
解除。
解除しますか？

迷いなくそのシステムを起動させる。

「ほんととは全6基のビットがあつてこそ真価を発揮するんだけど……」

…この際2基だけだけど仕方ないですしね」

2基のビットはルミィナの手の上に集まる。
刹那、光を発散し、眩い光がビットを包む。

「ワンサイズ・アビリティ
単一合成能力構成。移行武装、三又槍」
トライデント

「ワンサイズ・アビリティ？」

聞いたことない名前でしょう。

これはこの第四世代型プロトタイプの一の特徴なのですから。
一夏さんの零落白夜が持つ能力に似た一撃必殺の攻撃。

「アルテルナティーヴァ・ブリンデス」

エネルギーの光を転用した三又槍。
トライデント

「一夏さん！ これで勝負を決めます！」

「ならこっちもだ！ 零落白夜で決める！」

私たちは大技を展開しました。

先に当たるか、エネルギーが切れるか……。

どっちが先に終わるのか、これで決めます！

私はこの勝負に勝ってお姉様のキスを得れる権利を奪います！

→注※そんな賭けは実際に行っていません。ルーミナのは妄想です。

「やあああああ！」

「はあああああ！」

何度も何度も交差し、刃と刃がぶつかり合う。

刀と槍。

一夏さん、やりますね。さすがはお姉様と幼なじみというグッドポジションにいる男！

それから試合は動いた。



ピッという試合終了のブザーが響いた。

それも攻撃があたる直前で。

つまり私は負けたの……？

「わ、私の負け……?」

エネルギー残量を見る。
残り0でした。言わずもがなこの勝負……。

「俺の負けか」

「えっ?」

「ん?」

私と一夏さんの間になにか見解の相違が出てきました。
あれ? 私の機体のエネルギーはもう0ですよ?

「一夏さん、私はもう0ですよ?」

「いや、俺もなんだが……」

よくわかりません。
なんだか混乱してきました。
助けてください! 箒お姉様!

（織斑一夏とギエルミーナ・グラナドスの試合、両者同時にエネルギーが0となったため引き分けとする！）

アリーナに千冬さんの声が響きます。

試合を見ていたみんなは歓声。

私と一夏さんは前代未聞の結果に呆気をとられる。

何故か知りませんが、一夏さんと目が合います。

そして……。

『なんじゃそりゃー！／＼お姉様ー！！ 愛してるー！』

ハモりませんでした。むしろハモってたまるもんですか。
だって、敵とハモるなんて私の一生の不覚ですから！

第二話 可憐なる闘牛ーバンデリリエーロ・マタドールー
n. (f. i

第二話 可憐なる闘牛ーバンデリリエーロ・マタドールー (後書き)

いかがでしたでしょうか？

ルミーナというキャラは自分が作っただけに使いやすくまた暴走させやすいキャラです。

一度は作ってみたかった、お姉様〜と呼ぶキャラを！

さて、今回は戦闘でしたが、とりあえず原作のキャラに花を持たせる意味合いで引き分けにしました。

上手くできてないかもしれませんがどうでしたでしょうか？

またどんどん精進していきたいと思います♪

また次話をよろしく願います。

第三話をまたまた白河シンジさんにバトンをキラーパスします！

ちなみに、秋篠宮 元というキャラはシンジさん作です♪

では、またお会いしましょう！

第三話 振り返れば箒（お姉様）（前書き）

すみません。更新遅くなりました。

第三話ようやくお送りできそうです。

第三話は「オーシャンズ・イレブン」の前に一夏とシャル、その他モロモロが行った買い物のルミーナ版を書きました。

出来るだけ、原作の流れに沿った形で書いたつもりなのですが上手く行ってるか否か……。

では、最後まで楽しんで下さい。

第三話 振り返れば箒（お姉様）

―第三デッキ―

こんなことがあって良いものなのか……。でも実際に起きた……。

そりゃ、ちゃんと計算して動かなかった私も悪いとは思うけど可能性としては確かにあった。

前代未聞の同時エネルギー切れによる引き分け

のおおおおおおお！！

箒お姉様に見せる顔がない（しくしくしくしく4 X 6 ≡ 3 6）

「はあゝ」

私はあり得ないほど深いため息を吐いた。

ちなみにこのため息は一夏さんに勝てなかったからでないのは察してくださいね？

決まってるじゃないですか、箒お姉様に……。

「聞いているのか、グラナドス？」

「は、はいっ！！」

ちっ、相変わらずするどっ!?

パアアンツ!!

「人話を聞かんか馬鹿者」

「すみません……」

やっぱり、千冬さんの居るところでは変に考え事ができないなあ。
おっと、また余計な事考えてると何されるかわからないや。

「いいか二人とも」

『はい』

「今日の模擬戦、皆の良い参考になったとは言わん、ただ悪くはなかった」

珍しく褒められました。

槍でも降らなきゃいいですけど……。

「“しかし”だ。まだまだ見直す部分が多い」

千冬さんは一瞬緩んだ表情をすぐさま普段の表情に戻す。
何を言われるのやら……。

「織斑、大分周りを見ての行動がとれてきてはいるが、まだ機体性能に頼っている部分が見受けられる」

確かに一夏さんの行動は以前見ていた時よりもだいぶ鋭くなりました。

私の攻撃のかなめであるEMエストカード・マタドールを初見であそこまで対応できるなんて。

伊達に専用機を動かすだけの素質があります。

「次にグラナドス、お前は基本的な動作に関しては問題はない。ただ今日見せた瞬間加速イクニッション・ブレイクと高速切替、教わったのか、盗んだかは知らんが使用方法が雑すぎる」

使用方法が雑……。

まあ、見よう見まねでやった即席の技術だからなあ。雑と言われ
ても仕方がないかな。

「他人ひとの技術を使用するのは勝手だが、まずは自分の持っている技術技術を磨け。お前の行動は大きく見れば問題なく見えるが細かいところを突けば粗が見える」

「粗……ですか？」

「もっと簡単に言えばムラが多い」

うう、痛いところを突かれました。

自分でも分かってはいたんだけど、直接言われるとやっぱりきついな。

でも、千冬さんはそこまで私の事を見ていてくれるってことだよ。精進しないと。

「今日気づいたことは必ず次に活かせるように心掛けろ、良いな？」

「「はい」」

ムラか……。分かってはいるんだけどな、どうも自信がないと言
うか何と言うか。

何が引かかっているのか自分でもまだ気づけない。

ただ、自分で気づかなきゃ意味がないってことだけはわかる。何
かい方法ないかなあ。

「なあ、ルミーナ少し良いか？」

「何ですか？ 一夏さんに割いてる時間はありませんよ」

「酷いな、ちょっとくらい大丈夫だろ」

「まあ、ちよつとくらいなら良いですけど、何か相談ですか？」

珍しく一夏さんが私に何か聞いてきた。

今の流れから行くと多分、バンデリリエーロの事だろうとは思
けど。

「いや、相談って訳じゃないんだけど、今度の休みって空いてるか
？」

「へっ？」

今この殿方は何と仰られましたか？

私のIS、バンデリリエーロの事ではなく、私のスケジュールを
確認してきた？

「今何と？」

「だから、今度の休み空いてるかって」

「何故その様なことを？」

「次の休みに臨海学校で着る水着をシャルロットと見に行くんだけ
ど、ルミーナも一緒にどうだ」

うん、全くもってあの流れからの会話じゃない。

何で私を誘う必要が？ てかシャルロットさんと水着ってこの人はホント発言が怖いです。

「一つ聞いても良いですか？」

「何だ？」

「どうしてシャルロットさんと水着を？」

「ああ、そうカルミーナは知らないんだったな」

だからその理由を聞いてるんです。

どう考えてもデートの勢いじゃないですか。

多分、何も考えなしにシャルロットさんからの誘いにホイホイ返事しただけなんだろうけど。

「あいつ、IS学園来た時って訳ありで男として生活してたから水着がないからだよ。んで、俺もちょうど新しいのが欲しかったからついでに誘ったんだよ」

「へえ」

初耳です。

箒お姉様と学園メンバーに関してはいろいろと聞いていたつもりでしたがそんなことがあったんですね。

それにしても、誘ったと聞いて驚いたけど「ついで」だったんだ。

シャルロットさんかわいそうに。

んー、ここはシャルロットさんの顔を立ててあげないとね。そもそも休みを一夏さんと過ごすなんて考えられないです。

「私は心配しなくても持ってきてます。臨海学校の話はこっちに来る前から知ってましたから」

「だよなあ。どうするかな」

「別に他の人を誘う必要は無い気がするんですけど？ 水着を見に行くんですよね？ 下手に誘ったまたらどやされる気がします」

「買い物だったらみんなで行った方が楽しいのにな」

「そういう問題じゃ……はあ、もう好きにしてください。私は間に合ってますから楽しんできてください」

「そ、そうか。悪いな変なこと聞いて」

何でだろ、ただ買い物に行くか行かないかだけの会話でかなり疲れしました。

ただ何となくだけど、みんなが一夏さんに好意を寄せるのかが分かった気がします。

私の思い違いであってほしいけど、それが確かなら強敵すぎます。箒お姉様をあの魔の手から助け出さないと。

「すれ違った犬を見て笑った」

「もうっ!! ややこしいこと言わないでください!!」

「呼んでるのに無反応だからだろうが」

逆切れされたよ。

分かっちゃいたけど、かなり理不尽だ。

「つーか、何故に篠ノ之の尾行なんてしてるんだよ」

「誤解を招く言い方はよしてください、これは尾行ではありません。
見守っているんです!!」

どこをどう見ても尾行にしか見えないだろ。

スペインでは尾行の事を見守るって言うてるのか？ 否、そんな
わけがない。

これは俺個人の心の中での意見だが、見方を変えればただのスト
ーカーにも見える。

大切なことだから二度言っておく、あくまで俺個人の心の中での
意見だ。

「はいはい。んで、何で篠ノ之を見守ってるんだ？ 別に普通に声
かければ良いのに」

「ちっ、ちっ、ちっ。わかってないですね、偶然を装うタイミング

を探してるんですよ」

「何故に偶然を装う必要がある。逆に相手に不信感を与えるだけな気もするけど」

「答えは至極簡単ですよ。ただ昨日の夜一緒に出掛けようと声を掛けたら何かを隠すかのように予定があるって言われたので」

「それって断られた……」

「予定があると言われただけです!!」

うん。恐らくだが休みの日までルミーナにくつつかれるのは嫌だからだなこりゃ。

あり？ 篠ノ之が居なくなった。

「おい、グラナドス」

「何ですか？」

「篠ノ之が居なくなったぞ」

「ええええ!! ちよつと、ちゃんと尾行してくださいよ!!」

おい、今こいつ尾行って言わなかったか。

この状況でツツコミを入れたら俺は殴られるだろう。うん、黙っておこう。

「誰を探してるんだ、秋篠宮？」

「誰って、篠ノ之に決まって……」

俺は一瞬にして言葉を失った。

まあ、そうなる要素が俺の真後ろに居たわけだからな。
振り返れば何とやら。

そこには表情は普段通りだが声音があらさまに危険地帯だ。それを象徴するかのようにこめかみ辺りにわずかだが怒りのマークが……。

「秋篠宮くん？ お姉様見つかりました？ こんなところで見失うなんて冗談じゃないですよ」

「グラナドス、今は発言を控えろ」

「見つけたんですか？」

「見つけたと言えば見つけたが、正しくは見つかっただ」

「何を言ってるんですか、あれだけの距離で見つかるわけが……」

お見事。

こっちを振り返った瞬間言葉を失いやがった。

喜べ、振り返れば箒（お姉様）だ。

「お前たちはコソコソと何をやっている!!」

「お、落ち着け篠ノ之。俺は過失だ。むしろ被害者の立場だ!!」

「ちよっ、秋篠宮くん何言い逃れをしようとしてるんですか!!」

「良いから、そこに直れ!!」

「「はいっ!!」」

どこからともなく竹刀が登場。

俺とグラナドスに切っ先が向けられた。これ以上は無駄な抵抗になる、俺はまだ死にたくない。



あの後、お姉様の説教は三十分弱続きました。

私と秋篠宮くんはこの間ずっと正座だったと言うことはここだけの話。

「尾行するくらいなら声を掛けろ、まったく」

「だって、昨日誘ったら、とっさに何かを思い出すかのように用事があるって」

「あ……う……、そ、それはだな」

さっきまで説教をしていたお姉様が、急に昨日の件を掘り返した言葉で詰まらせました。

何か裏がある？ と感づいたのは良いけど、検討が付かない……。それにしても箒お姉様って表情や態度の変化が激しい様なそうで無い様な。

うーんと考えてる最中、秋篠宮くんが先にお姉様に声を掛けた。

「なあ、篠ノ之」

「な、何だ」

「もしかして個人的な買い物とかでもあったのか？ そうでなきゃこんな駅前のショッピングモールに来ないよな普通」

「個人的な？ 私には言えない何かを買うつもりだったんですか！
！」

私は性懲りもなくお姉様を問い詰めてしまった。

でもそんな悠長なことは言ってられません！！ なんせ、お姉様の“個人的”な買い物なんて聞いたらついつい妄……ゲフンゲフン、想像してしまうじゃないですか。

「私が何を買うに来ようと個人の自由ではないか！！」

「気になるじゃないですかあ、教えてくださいよお」

「こら、ルミーナ腕にしがみ付くなっ、周りに人が居るのだぞ、恥ずかしいではないか」

「教えてくれるまでずっとこのままいますよ？」

「離れろ、今度は本当に竹刀で制裁を加えるぞ！！」

脅しですか？ 武力をもって私を鎮めますか？ それは無理な脅しですね。

私はそんなことでは負けませんよ。何たって箒お姉様のためなら、たとえ火の中、水の中、草の中、森の中です！！

流石に、土の中、雲の中、お姉様のスカートの中までは行きませんよ？

そんなことしたらただの変態じゃないですか。

私が行くならもちろんお姉様の私室に決まってるじゃないですか！！

「おい、グラナドスそのくらいにしておけ、見てるこっちも恥ずかしい」

「箒お姉様が教えてくれるまでは絶対に離しませんよ」

「わかった、わかった！！ 教える、答える、ちゃんと全部言ってるから離してくれ」

「本当ですかっ♪」

よし!! この勝負私の勝ち。
さあ、聞かせてもらいますよお。

「……ぎだ」

「???」

「何だって?」

「だから、……ぎだ」

この期に及んで往生際が悪いですよ箒お姉様。
とりあえず私はさらに追い打ちを掛けんとばかりにじーっとお姉様を見つめた。

「水着だっ!!」

「ほえ?」

「水着?」

「そうだ、水着だ。以前着ていたものが小さくなったから新しいのを新調しようと思ったただ、悪いか」

「いや、悪くはないけど。ただ水着を買うのになぜ予定をごまかすまでの事をしたのかと」

確かにそうです。

そりゃあ、もし水着を見に行くなんてあの時言われてたら、私は有無を言わず付いて行って、あんなことやこんな……ことはしません！！　とは言い切れないかな？

「良いではないか、一人で水着を買いに来ても！！　それに、個人的な買い物に付き合ってもらうのも悪いしな」

「まあ、篠ノ之がそう思うなら、俺はそれで構いやしないけど。てかそもそも俺は呼ばれずらしてないからどうこう言えないけどな」

「それで、その水着はもうお買い上げ済みで？」

「いや、今から行くところだったのだが、あれを見てくれ」

箒お姉様が指差す方向を見た瞬間、私は急いで物陰に隠れた。

うん、あれは絶対に見間違いない。だって秋篠宮くんもいつでも逃げれるような体制になってるし。

「ここまで来て、うちの担任と副担任がそろって居るとか凄い不運だな」

織斑先生と山田先生……。

まさかこんなところで出くわすなんて思ってもいなかったです。と言うよりも、視線を伸ばせば宿敵一夏さんまで居るじゃないですか。

まあ、出かけるとは聞いていたから出会う可能性は無きにしも非ず……。

「こともあろうか、その目の前にはシャルロットさんと一夏さん……何をしでかしんたんでしょう」

先生「Sの前に正座させられている二人を見て私は疑問符を浮かべた。

男女が買い物をするこゝつて禁止されてたっけ？ そんな的外れな疑問を持った私が本当の事実を知ることとはこの先もなかった。とりあえず、一夏さんが何かしたことには変わらないのかな。

「どうするんだ、篠ノ之？」

「ううう、この状況下では動きにくいな」

「あのお、もしよければ喫茶店でお茶しませんか？」

ここで見つかると色々と面倒が起きかねないから何とか場所を移動しないと。動かないと。

とにかく一番はどこか休める部分を探して、そこに入る！！ 頑張れ、私！！

そりゃ、マドリード、バルセロナ、バレンシアの3都市だったらこのくらいのレベルに到達するだろうけど。

「ルミーナはスペインのどこ出身なのだ？」

「グラナダっていうアルハンブラ宮殿が有名な都市です。賑やかかって言うより穏やかな感じの場所ですね」

「そんなところでもISってあるもんなんだな」

「グラナダには流石にないですよ。私は生まれがグラナダだけで、あとは首都のマドリードに住んでましたから」

スペインでISを研究、開発しているのが、首都のマドリードを初め、バルセロナ、バレンシア、サラゴサの4都市。

そのうちのマドリードに研究所を構えるオレハ社。そこが私の所属するIS専門の研究所。

そこで開発されたのが未だスペイン国内でも秘密裏にされていた第四世代型プロトタイプIS。

その1号機が私の手元にある《バンデリエーロ・マタドール》。とある事情により今は私の専用機、そして機密漏えいを防ぐべく代表候補生として日本に來たってわけです。

「それにしても、第三世代型が軌道に乗りだしたと言われているところに第四世代型のプロトタイプか」

「私も初めて聞いた時は驚きましたよ」

当初、私はプロトタイプの特ストパイロットとしてずっと、第三世代型の実戦向きに改良されたISの特ストだと思ってたんですが、まさかの第四世代。

何かしでかすかと思ってはいましたが、やることが大きすぎました。

「ん」

「箒お姉様何か気になることでも？ 何でも聞いてくださいね、答えられる範囲は決まっていますけど」

「いや、何でもない、気にするな」

「そうですか？ 何だか複雑な表情してるから気になりますよ」

「大丈夫だ、気にしなくていい。それよりもだ、模擬戦で使った、
ワン……」

ワンサイズ・アビリティ
「単一合成能力ですか？」

ワンサイズ・アビリティ
「そう、それだ。その単一合成能力って言うのは何なんだ？」

ワンオフ・アビリティ
「俺も気になってたんだよ。単一仕様能力と雰囲気似てるけど同じものなのか？」

「何と言われても……ん、何て言えば良いんでしょう」

正直なところ私もこの単一合成能力ワンサイズ・アビリティに関しては全てを熟知しているわけではない。

そのこともあって、どこをどう説明すれば良いのかがすぐに浮かびません。考えろ私!!

「えーつとですね。まず一言で言えば単一仕様能力ワンオフ・アビリティに類似した能力です」

「類似か……。見ている限りでは確かに同じ感じに見えたけど、何か違いとかあったりするのか？」

「全く違うところで行くと、単一仕様能力ワンオフ・アビリティが自然発生するのに対して、単一合成能力ワンサイズ・アビリティは任意的に発生できるんです。ただ、1回使うと半日以上経たないと使えないんですよ。実質1回の戦闘で1度って感じですね。それに、武装融合が解除されないんで妙に不便だったりするんですよ。研究所の人たちは諸刃の剣だと言ってました」

「確かに、任意に発動できるからこそ、使い道を誤ると勝負を左右することになるな」

武装融合も特徴の一つで、この能力で固有武装を融合させ一撃必殺の武装に変化することもできるけど、これが難点なところでもある。

でも、さっき発言したみたいに、融合が任意で解除できなくなるから、戦闘が終了するか、エネルギーが底を尽かない限りはずっとそのままと、固有武装しか存在しないバンデリリー口にとっては

最後の手段って感じですね。

ここまで話しちゃいましたけど良かったのかな？

まあ、いずれは話さないといけないことだし。それに箒お姉様も秋篠宮くんも誰かに言いふらすみたいなことしないから大丈夫かな。けど、気になるのは秋篠宮くんってIS使えないのに何でここのISに関して知ろうとしてるんだろう。

模擬戦の時も一夏さんと一緒に何かしてたみたいけど……。何だろ、良くわからないけど変に引っかけりがある。

「しかしだ、第四世代型と言うだけあって、燃費の悪さは白式と同じなのだな」

「第三世代型の燃費向上を引き継げればよかったんですけど、如何せん第四世代のコンセプトをコンバートしようとした結果出来上がった機体ですから」

「となると、第四世代と言えるISってこの二機だけってことになるのか」

「現状ではですけどね」

「どういうことだ？」

「い、いえ。なんでもないですよ。それよりそろそろ水着見に行きませんか？ 流石にもう誰もいないはずですから」

「あ、ああそうだな。少しだけ見てから帰るか」

ふう、危ないところでした。

思わず、2号機と3号機の事まで言いそうになりました。

あっ、ちなみに皆さんもこのことはご内密に。こんなことがバレたらまた千冬さんに何言われるかわかったもんじゃありませんからね。さて、今からは楽しい時間です。お姉様、どんな水着を……グフ、エヘヘヘッヘ。

「おい、グラナドス」

「うふ、うふふふ」

「ルミーナ、また不敵な笑みが出ているぞ……」

「はっ!？　また変なもう……想像を」

「あのさ、グラナドス」

「な、なんですか?」

「もう、篠ノ之とは合流できたから俺はもう解散で良いよな?」

「はいっ!!　もちろん、解散で問題ないです!!　ありがとうございます!」
「ございました!!」

「何か引っかかる返答だな」

早く、お姉様と二人っきりにさせてください。てかさそろ。
おっと……私としたことが言葉遣いが。気を付けないとお姉様の

前でもやりかねない。

でも、秋篠宮くんが一緒に何とか助かりました。もし、一人だったら制御しきれてなかったかも。

あれ？ 私……。いや、そんなはずないよね。うん、きっと何かの違い。

「篠ノ之、俺帰るけど問題ないよな？」

「あ、ああ。個人的にはルミーナの制御をしてほしいが、流石に水着を買うのに付き合わせるのもなんだ」

「まあ、問題ないことだけ願って引き上げるわ。もしかしたら一夏と合流できるかもだし。あいつに何か伝えておくこととかあるか？」

「なっ！？ 何を言っている。何故私があいつに何かを伝えねばならんのだ！！」

「悪い、悪い冗談だよ。また明日学校で」

「秋篠宮っ！！ 人をからかうな！！」

「グラナドスも、ほどほどにしとけよ。でないとしの……」

「わ、わかってますよっ！！ 余計なこと言わないでくださいっ！！」

相変わらず気の抜けない男、秋篠宮元……。
一夏さん以上に気を付けないといけない男性なのかもしれなくて

すね。

敵に回すと厄介なのでどこかで手を打たないと。

そんなことを考えながら私はこの後、お姉様と“二人っきり”で水着を見に行きました。

ただ、私が選ぶものを全て拒否……。

何故、何故ですか！！ 私がお姉様にピッタリな水着を選んでい
るのに（涙

えっ？ どんな水着を選んだかって？ 決まってるじゃないです
か、マイク……ひい。鬼の形相を見せないでお姉様！！

結局なところ、パツと見てしっくりきたのがあったみたいでそれ
を勢いで購入してました。

まあ、お姉様の水着姿が拝めるだけでも良しとしましょう。

楽しみだなあ、臨海学校♪

（第三話 振り向けば箒（お姉様） f i n . ）

第三話 振り返れば箒（お姉様）（後書き）

繰り返し、更新遅れて申し訳ないです。

仕事を理由にしたくないのですが、多忙が続きました……。

さて、今回のお話如何でしたでしょうか？

原作では一夏とシャルのお楽しみ買い物タイムでしたが、我々のI Sはもちろんルミーナのお姉様タイムで行かせて頂きました。

箒が勢いで買ったあの白い水着……。うん、素晴らしいよ箒さん。シャルの水着も捨てがたいけどあんたが一番だよ。

と冗談はさておき、それを買うに行くと言うシーンをルミーナと元を組み込んで想像しながら書いてみた所存です。

久々の日常シーンを書いたので少してんやわんやになりましたが、何とか書き終えました。

いやはや、二人で回してるので次は言わずもがな九浄夕さんに至近距離で全力パスします！

次話はお楽しみInnocent Spica版「オーシャンズ・イレブン」をお送りする予定です。

となると、次私が書くときは福音や紅椿の登場……はたまた羅雪もか……頑張らねば。

では、またお会いしましょう★

第四話 海に着いたらお姉様ーオーシャンズ・イレブナー（前書き）

かなり遅れた更新となってしまいました。

ユーです。

すいません……。なかなか手がつかずで気付けば3週間以上も（汗）
こからしばらくは3週間スパンになりそうな気がします。

頑張って書いて更新していくので気長に待ってもらえると嬉しいです。

そして！

今回もルミナ大暴走です。

久々の日常でユーはテンション上がってやりたい放題やりました。

何個かネタを仕込んでいますが、気づけたらすごいかもしれません。
それではどうぞ！

第四話 海に着いたらお姉様ーオーシャンズ・イレブンー

そこは海でした。

それはもう綺麗な海でした。

青い海！ 白い砂浜！

そしてお姉様の水着！ イッツプライスレス！

あの豊満なお姉様もお胸をじっくりと堪能でき……こほん。

こんなこと思ってたらお姉様にまた何かされてしまいますね。

何か……何かって何？

はっ！？ もしかして……

「お姉様の個人的おしおきタイムっ！！ あふん。ティツシュ、テ
イツシュ」

鼻血出てきちゃいました。

ちよっと興奮しすぎましたね。

お姉様のおしおき受けたいなあ。

無理だってわかってるけどね（キランっ♪

「さあて、お姉様はどっこかな♪」

ぽふんっ、と何かとてもいいような感触が背中に当たりましたよ？
いきなりすぎて頭が回りませんが、いい！ 実にこの感触良い！

「だれ、だ？」

きゅぴんっ！

来ましたよ！ 某種割れが！

この感触、大きさ間違いありません！

「この柔らかさ、そしてこの大きさ……間違いありません、箒お姉様です！」

「私の声ではなく感触でわかるとは、さすがは私のルミナだな」

「はいっ！ お姉様のことは熟知……って、あれ？ 何か私、とても最高に幸せな言葉を聞いた気がしたのですが……？」

「ふふっ、何か言ったかな、私は」

「はい！ それはもう超激烈に猛烈に言ってくださいました！ おお姉様！ もう一度もう一度だけ言ってください！」

「仕方ないやつだな。さすがは私のルミナだな」

どきゅんっ！

な、なんという破壊力でしょうか。

私の精神力を一瞬でゼロに持っていくなんて……！

今の言葉はしっかりと脳内録音&レコーダー録音しましたよ！

携帯に送信して目覚まし音に設定しちゃいます！

はうううん！ 箒お姉様♪

「はわわ、わ、私……もう消えちゃいそうですよ」

「ルミーナ、お前消えるのか……？」

「えっ？ い、いえ、箒お姉様を残して消えるなんて……」

「そうだよな、私たちはもう特別な関係なんだ。置いて行ってもらっては困る」

「あふんっ！！！」（2度目です

な、なんなんですかっ！？

今日のお姉様は！

いつもなら冷たくスルーされてるのに！（↑自覚はあったみたいだ。

今日のお姉様は最高すぎます！

私の血をどれだけ吹かせた気がすむんですか！

出血多量で死んじゃいますよ！ まあ、お姉様で死ねるなら本望

ですが。

せっかくのお姉様の水着姿を心行くまで堪能できるのにつ。

「大丈夫だよ、ルミーナ。そのまま倒れておけ、私が部屋でゆつくりと介抱してやる」

「かかかかかかか、！ 2人っきりの介抱っ！！！！！？ お姉様、いいんですかっ！？」

「もちろんだ、ルミーナ。私に全て委ねろ」

「は、はい／＼／＼ お姉様」

フラグ立ったよね？

これはお姉様フラグだよね！

夢じゃない？ あ、そうだ！ 確認すればいいんだよ。

こう、ほっぺをぎゅーって。

「あ、その前にお姉様。これが夢かどうか知りたいので、私のほっぺつねってください！」

「ふっ、いいだろう。大丈夫これは夢じゃないから」

お姉様のお手が私のほっぺを抓ります。
お姉様！ やってください！
これが夢じゃないと証明してください！

「いくぞ、ルミーナ」

「はい、箒お姉様！」



「痛たたたたたたたっ！！！！？ いったーい！」

「あ、やっと起きたわね。ルミーナ」

「ふ、ふえ？ り、鈴ちゃん？」

「何寝ぼけてんのよ？ あんたが抓れって言ったんじゃないの」

「……………はい？」

「私はお姉様をお願いしたはずですが？」

「はぁ？ あんたが私に抓ってってお願いしたんじゃないの」

「……………あれ？」

私は周りを見渡すことにしました。

私の隣に座っているのは中国の代表候補生の鈴ちゃん。

そしてその前方やら後方やら横やらに座るクラスメートたち。

どうやら乗り物の中みたいだ。

乗り物の中？

「あ、そっか。そういえば、臨海学校に……………って、ええええええええ
っ!？」

「ど、どうしたのよ!？ いきなり大声を上げて。あんた大丈夫？」

「そんな……………そんな……………そんなあああ！ さっきのが夢だなんて！
夢オチだったなんて！」

無情すぎますう！

QBが居たら銃を乱発したいっ！

そして“もう、わけがわからないよ” って言いたい！

「ね、ねえ！ 鈴ちゃん！ 私をさっきの時間まで戻して、お願いっ！ 代表候補生でしょっ！？」

「ルミナ、代表候補生だからって時間を操れるわけないでしょうっ！」

「うう、そうだよね……」

テンション激下がりですよ。

お姉様との愛の時間が夢だなんてっ！！

もう、やってられねえーですって感じですよ。

臨海学校と言ったらお姉様と甘い時間を過ごすって暗黙のルールがあるんですよ！

「はう、せめて隣にお姉様が居たら……」

「わるかったわね、隣が私で。仕方ないでしょ、私たちクラス違うんだから」

「そうだよね。あ、そうだよ！ クラスチェンジしたら万事解決だと思わない？」

「思わないわよっ！」

「だって私はお姉様と一緒になれて幸せ。鈴ちゃんは一夏さんと一緒になれて幸せ。幸せスパイラルだよ！」

「はっ！！ た、確かにそうね……。盲点だったわ」

「でしょっ！？ 今から先生に直談判を……って、あいたっ！」

「ツっっ！！！！」

ここで脳天直撃チョップとは痛いです。
一体誰ですか、もう……。

「って、せ、先生……」

「あら、私のクラスが嫌ですか？ グラナドスさん、凰さん」

先生の名簿表の角が鋭く光ります。

……さすがに大事な脳細胞が何万も死ぬのは私のごめんですし、
痛いイヤです。

ここは素直に。

『ごめんなさいでした！ 先生のクラスが最高です！』（究極のハモリ成功。）

「なら次は気を付けるようにしてください」

『はい！』

「では皆さん、外を見てください」

窓の外ですか？

どうせまだ……。

っと思っていたら。

「きゃあああ！ 海だー♪」

クラスの子が年相応にはしゃいでしました。

私だってさすがにこれはテンション上がります。

だって、女子高生だもん♪

なんちゃって、てへっ♪

ー砂浜“ビーチ”ー

「青い海！」

「白い砂浜！」

「最高の景色！」

「お姉様の水着姿！」

『さいこうーっ♪』

1年生のみんなで最後はハモりました。

こういうときの女子の団結力は高すぎます。最初の件だくだりってどんだけ空気読んでるんですか。

青い海、白い砂浜。そりゃ最高ですよ。

青春ですもんね。

ですが私にとっての最高はもちろんお姉様の水着姿！

それが最優先事項です。

これだけは絶対に譲れませんっ！

もう一度言います。

譲りたくありません！

「ふふふ、この日の為に私は準備してきましたよ。携帯のカメラか

ら、デジカメ、ビデオ撮影に一眼レフ、なんでもござれの撮影器具！これで私はお姉様を盗撮……こほん、言い間違えました。お姉様を撮影します！」

ふふふ、モチベーション上がりすぎて。もう……。

今の私ならなんでもできる気がします！

あの千冬さんだって倒せる……。

「ん？　なんだ、グラナドス？」

「なんでもありません！」

ちょっと言い過ぎました。

あの魔王は無理です。

無理無理無理かたつむりです。

「そうか、てっきり私でも倒してみせるのかと思ったのだがな」

「そんなかたつむり、無理です！」

「かたつむりがどうした、グラナドス」

「い、いえ。なんでもありません」

「ふっ、ならいい。よし、全員あつ……」

ザッ！

と音がなった気がします。

一瞬です。瞬時加速を超えらるゝってても過言じゃありません。

この学年のこのときの団結力と運動神経はもはや超人クラスと化します。

「集まっているようだな。よろしい、それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないうに注意しろ」

『よろしくお願いします！』

千冬さんの言葉に私たち全員が同時に声を出す。

まさにじよしこーせーパワーですね♪

「あら、こちらのお二人が噂の……？」

「ええ、まあ今年は二人男性がいるせいで浴場分けが難しくなつて申し訳ございません」

「いえいえ、そんな。しっかりした感じのする男の子じゃありませんか」

「感じがするだけです。おい、織斑、秋篠宮。挨拶しろ」

二人して女将さんに頭を突き出されています。
お似合いですよ、一夏さん、秋篠宮くん。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「秋篠宮元です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

「では、部屋を案内してもらおう。その後は夕食まで自由行動だ」

ってことでやっと自由行動です♪

これでやっとお姉様の水着姿を堪能することができます！



海です！

水着です！

お姉様です！

「と言うことで……お姉様の美しい肢体を思う存分撮影して、さらに脳内保存です♪」

とそんなところ……。

私のライバルが登場してきましたよ。

「おう、ルミーナ。一人か？」

「そういう一夏さんはシャルさんとデートですか？」

「も、もう、ルミーナったら。お似合いだなんて……」

そこまで言ってますが、シャルさんがいいならそれでいいと思います。

だってこの作品のヒロインってシャルさんとラウラさんじゃないですか。

それは言っちゃダメなお約束でしたね、てへっ♪

「それで、一夏さん、シャルさん。私に御用です？」

「ああ、そうだ。のほほんさんたちがビーチバレーしないかって言ってるんだけど、ルミーナもやらないか？」

「んー、せっかくのお誘いですが先約があるのでお断りしますね。私には大事な使命があるので」

「そ、そうなのか。なら時間ができたら来いよ、みんなで楽しもうぜ」

って何か爽やかに行きましたよ。

あのフラグハーレムさんは。

まあ、超朴念仁が無ければとても良い人だと思います。

もちろん、お姉様が一番ですが♪

「さて、ではお姉様。今から行きますです！」

と、ちょうどいいところにお姉様が！

お姉様♪

「む、なんだ。ルミーナか。ルミーナ、一夏を見なかったか？」

「ぶうー、一夏さんならあっちでビーチバレーに行きましたよ？」

「そ、そうか……。少し遅かったか」

「あの、なら……。もし箒お姉様がお暇でしたら、その私と……」

「う、む。そうだな、ルミーナ。私に付き合ってくれるか？」

もちろんです！ お姉様！

全力でお付き合います！

もちろん今の照れた顔とその水着写真はすでついさつき確保しました！

我ながらシャルさんのラビット・スイッチ高速切替は使えますね

注…こういうことに使ってはいけません。お兄さんとの約束だぞ？

B Y 秋篠宮

「と、とこで……。ルミーナ。そのカメラの山はなんだ？」

「え？ もちろん愛すべき、キャっ♪ 愛すべきって言っちゃった」
♪

私って乙女です♪

「……………」

いゃん、そんな目で見つめないで！
テンションあがりますから！

「もちろん、お姉様を撮るためです！」

「よし、私は帰らせてもらう」

「あーん、お姉様待ってください！ まだ撮り終えていないんです」

箒お姉様が全力で走りだしました。

何故かわかりませんが（↑自分のせいだと気づけ。

ですが！

そんなお姉様を追いかけて……。

「追いかけて？ はっ！ これって夢の中であつた……。砂浜で恋人っぽく“あはは、待てよ”“うふふ、捕まえてみて♪”みたいなやりとりではっ！」

これはいいです。

最高です。

夢にまで見た……夢にも見ましたが。

お姉様と砂浜で追いかっこ！

お姉様、ルミーナは今追いかけます！

「待ってくださいー箒お姉様♪」

「だ、だからどうしてお前はそれほどまで私に構う！ 私たちは同性だぞ！」

「同棲ですか？ モチのロンでいいです！ 速攻で手続き取ってきます！」

「字が違うわ！ ルミーナ、話は後で聞く。やはり、一夏のところに行かせてくれ！」

「嫌です！ そんなの神様が許しても私が許しません！ 前に神社でおみくじ引いた時に巫女さんが言ってました」

「何をだ！？」

「箒お姉様と結ばれるって！」

「そんなの言うか！」

「言っていました！」

もちろん脳内ですが。

おみくじ引いた時は大吉でしたよ？

恋愛運も最高。

つまり、こういうことなんです！

「箒お姉様！ ルミーナはお姉様のためならバジリスクを倒そうがドラゴンを倒そうが巨大サメを一撃で屠ったりしてきます！ あ、巨大イカは生け捕りの方がよろしいですか？」

「意味がわからんわ！　なんでそんな架空の幻想話なんだ！　いいか、ルミーナ。私を……」

「いいじゃないですか！　私と一緒に楽しみましょう♪　二人きりの思い出作りを」

「わかってる。だが、カメラはやめてくれ。恥ずかしいんだから」

鬼ごっこしながらも照れる筈お姉様……。

萌えます！

お姉様、萌えです！

一夏さんたちとは離れた場所でひたすらに“二人っきり”の鬼ごっこ。

誰にも邪魔されない至福の時。

もう、ルミナ。

思い残すことはありません。

「そうですねーそんなに砂浜で運動が好きならプレゼントです」

「わあーい……ってあれ？ どうして先生が……」

「グラナドスさん、あなたが海の砂浜で走ることが好きだとは思わなかったです。そんなあなたにプレゼントです。100m遠泳10往復いつてきてください」

「えっ！？ な、なんでですかっ！ 今は自由行動のはずじゃ……」

「ええ、自由行動です。けど、騒ぎすぎて迷惑をかけるな、と織斑先生から聞いているでしょう？」

「うっ……」

「理解しました？　なら行って来てください。行かないのでしたら……」

「も、もちろん嬉しくありがたく頂戴してきます！」

あーん！　最悪です。

せつかくの海がこんな鬼訓練になるなんて！

でも、あの名簿の角が怖いんです。

痛いんですよ、あれ。

もう、お姉様のことは一旦やめておくしかありませんね。

罰を受けてくるです。

だから最後に言います。

これだけ言ってやってやるです。

「お姉様の水着姿は最高です！　特に白とかもう純潔すぎます！
お姉様、愛してる〜！」

〜第四話　海オーシャンズ・イレブンに着いたらお姉様　f i n .　〜

第四話 海に着いたらお姉様ーオーシャンズ・イレブンー（後書き）

というわけで第四話完了！

これで次はシンジさんに丸投げします♪
頑張って受け取れえ！俺のウニボール！

これが……俺のウイニングボールだ！

では、しまっていこー！

と暴走役のキャラブレイカーズ筆頭ユーさんでした。
ちなみに♪

キャラブレイカーズは本編のどこかでちよつとゲスト参戦させるつもりだったりします。

どっちなかで！

では♪また次回お会いしましょう！

第五話 常夏の青春と紅き翼（前書き）

まずは読者の皆様、大変お待たせ致しました。
更新遅くなり申し訳ございません。

仕事、プライベート、その他モロモロで執筆できず延ばし過ぎました。

しかも文字数も爆発……いや、ホントすみません。

さて、今回は前回のオーシャンズイレブンの続きです。

前回は海で泳ぐところまでで終わり、今回はその続きから福音戦に入るまでをルミナ版にまとめました。

ほとんどがオーシャンズイレブンの内容ですが、楽しんで頂けたらなと思います。

元や他のキャラも出てきますので探してみてください。

ではどうぞ。

第五話 常夏の青春と紅き翼

100m遠泳7往復目。

そろそろ足に限界を感じてきました。

100mと言ってますけど、往復なので実質は200m、総計2kmも泳ぎ続けなければいけない。

罰とは言え流石に一人でクルクルと同じところを泳ぐのはキツイ……そして何よりも面白くない。

元を正せば一夏さんが悪いんです！！↑立派な責任転嫁

「はぁ……、泳ぐことは嫌いではないですけど10往復は……ねえ」

何だかんだで10往復泳ぎ切った私は、少しばかり重くなった体を休めるべく、皆が集まっているところへと向かう。

えっ？ 何で箒お姉様を追わないかって？

私なりの自重ですよ。また先生に見つかったら、今度は10往復どころでは済まないですからね。

とまあ、そうこうしている内にビーチボールを楽しむ私の“敵”を見つけた。

てか、群衆みたいに人群がりすぎ！！

「あっ、ルミーナ」

私の存在に気付いたシャルさんが声を掛けてきた。

その不敵な笑みは何ですか、シャルさん。私に何をさせるつもり

ですか。

「ラウラが行動不能状態だから、手伝って欲しいんだけど」

「ラウラさんに一体何が……」

「あはは、一夏がね……」

またしてもあの男か。

ラウラさんの格好を見るからにどうせ「可愛いぞ、ラウラ」みたいなことを発言したとしか考えられないですけど。

それはともかく、今私がラウラさんの代理で入るとすれば……。

「相手チームに入って良いですか？」

「えっ？　ちょっと待ってよ、こっちのチームが足りないんだから」

「そこで暇そうにしている秋篠宮くんに入ってもらえば良いじゃないですか」

「オイ、コラ待てグラナドス」

ちっ、聞こえてましたか。

でもまあ、満更でもない感じじゃないですか。

「いっその事、男性陣VS女性陣でやってみる？」

「ああ、それ良いねえ」

「おりむーとしのみーをばきゅんばつきゅーん」

「しのみーって俺の事かっ!？」

「頑張ろうぜ、元!!」

「まて、まて、まて、頑張ろうの前に死ぬぞ俺ら」

「まあ、そんな固いこと言わないでくださいよ」

まったく、秋篠宮くんは余計なことをブチブチと……。これは問答無用で攻めるしかないですね。一夏さんと一緒に沈んで下さい!!

「おいっ、元!! 後ろっ!!」

「あん？」

振り返ればあゝ。

ドストラァーイクツ!!

スパアーン!!

見事なまでな快音。

自分でやっておきながらかなり驚いてます。
まさか本当に顔面に直撃するなんて思っても居なかったですから。

「おい、大丈夫か!？」

「フッ……フッフ……」

「元？」

「秋篠宮くん？ 大丈夫……」

「おもしれえ、やってやろうじえねえか」

秋篠宮くんの言葉遣いが変わりました。
これは流石にやり過ぎたか……。
早く謝らないと。

「あ、秋篠宮くん、ごごご、ごめんなさい!!」

「一夏、ボールよこせ」

「元、無理するなっ……」

「良いから、よこせええ!!」

完璧怒ってますよコレ。

何とかして抑えないと。てか、私が行ったら逆効果なんじゃ！？
ふええええ、だれか何とか、お姉様ああ！！

「何をやっているか、バカどもが」

「ふべらっ！？」

私の目の前に居たはずの秋篠宮くんが一瞬にして視野から消えた。
いや、正確には秋篠宮くんの頭上から振り下ろされた正義の鉄槌、
もとい出席簿がきれいに秋篠宮くんの脳天を直撃、その勢いに耐え
られず膝を崩して砂浜に顔面から倒れただけである。

正直、秋篠宮くんには申し訳ないけど、織斑先生の登場はまさに
救世主の如く！！

皆もその光景には開いた口が塞がらないような表情をしていた。

「自由にしろとは言ったが、騒ぎを起こせとは言っていないぞ」

「千冬……」

「織斑先生だ、バカ者」

一夏さんも流石に頭は上がらないようですね。
てか、本当に織斑先生の存在は大きいな……。居るだけで空気が
違う。

ってちょっと待って下さい。

今更ながら……先生が水着？ しかも大分キワドイ黒の水着。

これはこれで悪く……ゲフンゲフン。

これじゃあ、たっだのおっさん発言じゃないですか。

それにしても織斑先生きれいだなあ。

普段と変わらず、腰に手を当てて立ってるだけなのに服装がスーツから水着になるだけでこうも変わるなんて。

「お前ら、12時を回っていることを忘れているな？ さっさと食堂に行って昼食でもとってこい」

「先生は？」

「私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらおうとしよう」

流石に生徒である私たちがバカ騒ぎしてる中、先生たちは仕事してるんだもんね。

こういう時にこそ休んでもらわないと。

またどやされる前にちゃちゃっと移動しちゃいましょう。

私たちは昼食をとるために旅館の食堂へと向かった。

その食堂へ向かう際には織斑先生の水着姿で話が盛り上がっていた。

「それにしても凄かったよねえ」

「私もあんな風になりたいっ！！」

「あんたには無理よ」

「秋篠宮、大丈夫か？」

「はい、なんとか」

「そうか、悪かったな。指導とは言え加減を忘れていた」

「私も調子に乗ってごめんなさい」

珍しいこともあるもんだ。

女性の方から、しかも謝りなさそうなグラナドスと織斑先生に謝られた。

悪くない。

「どうしたんですか？ 素っ頓狂な顔して」

「あっ、いや。なんでもない。俺の方こそ度が過ぎてたみたいだ。先生もすみません」

「私が言うのもなんだが、無理はするなよ」

「はい、でもせっかくなので軽く泳いできます」

うむ、ここでこのまま居ておくのも良かったけど流石に気恥ずかしい。

とりあえず俺は、一夏を探すついでに泳ぎに出た。



そしてあつという間に自由時間は過ぎ、現在七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺たちは夕食を取っていた。

「うん、うまい！ 昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなあ」

「そうだね。ほんと、I S学園って羽振りがいいよ」

一夏が絶賛する横でデュノアも楽しそうに頷いている。

いささか不思議な感覚であるが俺も含め、ここに居る全員が今は浴衣姿である。

一夏が言うには食事中は普通浴衣禁止するものだとのことだが、この旅館では『お食事中は浴衣着用』と決まっているようだ。

俺にとってはどちらでもいい情報なんだけどな。むしろ家族等で旅館で食事する時って浴衣じゃね？ と思ったが、一夏にそれと言うと語りだすからやめておいた。

それに今はあいつの左右では今にも何かが勃発しそうな勢いだしな。

如何せん、デュノアとオルコットだしな。

「ねーねー、しのみー」

俺の隣に偶然座ることになった、のほほんさん？ まてまて本名は確か……そうだ布仏だ。のほとけ

畜生、一夏のやつが、のほほん、のほほん何て言うから本名を忘れるところだった。

「何だ？」

「いつも大変だねえ」

「急にどうした」

「いやあ、おりむーとルミルミのお世話頑張ってるなあって」

「お世話って……、いや、まあ強ち間違いではないか」

どうも布仏と会話するとワテンポずれるようなそうで無い様な。てか、しのみーは決定なのな。

ちなみにだが、こうやって今俺が居る席は適当に思われがちであるが、ちゃんとクラス単位で分かれての食事となっている。

その為、いつもクラスに顔を出すからクラスメイトと間違えそうになる凰とグラナドスはこの席の近辺には居ない。まあ、本当のことを言くと、グラナドスはいち十分ほど前まで篠ノ之の横が良いなとど暴れていたくらいだ。

流石に高校生にもなって駄々をこねるところを見たのは初めてだった。

「ねえねえ、秋篠宮くんってさあ部屋どこなの？」

今度は布仏の横に座っていた見た目とは裏腹に声が枯れ気味の夜竹だったか……が俺の泊まる部屋に関して話を聞いてきた。それに便乗するように谷本、鷹月の両名も加わってきた。

「それ気になる。どこ探しても織斑くんと秋篠宮くんの名前が無いんだけど」

「多分、私たちが騒ぎを大きくするのを防ぐだけだろうとは思うけど、気になっちゃって」

そう言えば、俺の部屋ってどこだ？

ここにきてとりあえず、織斑先生に連れられて職員用の部屋に荷物を置かせてもらったけど……。

まさか、職員用の部屋ってことはないよな。

「悪い、部屋の情報全く聞いてないや。多分一夏と同じ部屋なんだろうとは思うけど」

「んー、秋篠宮くんも知らないかあ。織斑くんに聞いてもまだ知らされてないって言うし」

そうこう話をしている内に、騒動が勃発した。

まあ、言わずもがな騒動の発端は一夏^{ヤッ}だけだな。

「あああーっ！ セシリアずるい！ 何してるのよ！」

「織斑くんに食べさせてもらってる！ 卑怯者！」

「ズルイ！ インチキ！ イカサマ！」

やっちまいやがった。

この状況下で食べさせるのはまずいだろう。
ほら見ろ、いたるところに感染したぞおい。

「ず、ずるくありませんわ。席が隣の特権です」

「それがずるいって言うてんの！」

「織斑くん、私も私も！」

「わああ！！ 俺じゃなくても、男なら元も居るだろう！」

あの野郎、なに飛び火させてんだよ！！

って、何を楽しそうに布仏はのほほんと笑ってるんだ。

「しのみーでも良いやあ。食べさせてえ」

「あああつ、本音、それは流石に抜け駆けだよ！！」

「席が隣の特権だよ」

待てえええ！

一夏、おめえ絶対に殴ってやるからな。
と一夏を睨みつけようとしたその時だった。
またしても鬼が降臨した。

「お前たちは静かに食事することができんのか」

その声に、全員が一斉に凍りついた。

「お、織斑先生……」

「どうにも、体力があり余っているようだな。よかろう。それでは
今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五〇キロ
もあれば十分だろう」

「いえいえいえ！ とんでもないです！ 大人しく食事をします！」

席を離れていた者はそそくさと自分の居た席へと戻る。

それを確認した織斑先生が一夏だけではなく、俺の方まで睨んできた。

「織斑、秋篠宮、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「「わ、わかりました」」

あの、俺は被害者なんですが。
何て言ったら、同罪だってまた怒られかねんな。
とりあえず俺は、次々と出てくる豪勢な料理に感嘆しながら食事を済ませた。



「ふー、さっぱりした」

「同じく」

食後に温泉。

本当に高校生の臨海学校か？　こんな贅沢ってありなのか？
温泉に入ったら、夕食での出来事がどうでもよくなった俺は一夏と荷物を置いている職員用の部屋へと向かう。

「あれ？」

「どうした一夏」

「これ」

俺と一夏が見たものは部屋の扉に張り付けられていた一枚の紙だ

った。

織斑千冬／一夏・秋篠宮元

どういうことだ？

とりあえず俺たちは部屋に入り荷物の整理を始めた。
とそこへ丁度、織斑先生が帰ってきた。

「ん？ お前らだけか？ 女の一人も連れ込まんとは詰まらん奴らだ」

「ええ！？ 織斑先生がその台詞言います」

「何だ、秋篠宮？ 連れ込む気だったのか？」

「いや、それは無いですけど」

誰が好き好んでこの部屋に女子を連れてくるんだ。

そもそも「織斑先生」の部屋って時点で恐れ多くて誰も近づけないし。

てか、織斑先生も温泉に行ってたのか。

俺は失礼ながら、この時だけ、織斑先生を日常の時と同じように千冬さんと言う観点で見えてしまっていた。

「なあ、千冬姉」

ごすつ。 目にも留まらぬ速さで鋭いチョップが一夏の頭を直撃した。

「織斑先生と呼べ」

「まあ、それはいいじゃん。俺たちだけだし、それに風呂上がりだし、久しぶりに――」



「箒お姉様の部屋はっ♪」

私は鼻歌交じりで部屋を抜け出し、エデンの園、もといお姉様の部屋へと直行する。

途中、教員と言うトラップや壁が立ちはだかりましたが、私の身体能力にかかればなんのその。

まあ、三度ほど制裁を喰らいましたが……。

「てか何で部屋割りもクラス別なんでしょう……。自由にしてくれたら私は問答無用で箒お姉様と同室にしてもらうのに……」

いつものことながら、二組であることに悔しさが隠しきれない。
鈴ちゃんが一緒に居るからまだましだけど、本命である箒お姉様

が居ないと楽しくないです!!

以前、このことを鈴ちゃんに直接聞かれて殴られたけど、そんなことは気にしない気にしない。

『い、い、いやああああ〜っ!!』

どこからともなく女性の……ってこれはセシリアさんの叫び声。
何があっただんでしょう？　ちよつと見に行ってみようかな？

『いい加減に……きゃ、何をするんですか！　やめ……』

やっぱりやめておこう。

流石にこんな中に入りたくない。

さて、箒お姉様の部屋に急がないと。



あれ？　あそこにいるのはお姉様？

それに鈴ちゃん？

「二人とも何やってるんですかこんなところ……」

「シイッ！」

急に鈴ちゃんに口を塞がれました。
モガモガしている最中に箒お姉様も人差し指を立てて口元で「シ
イッ」としてきた。

（およ、ここって織斑先生の部屋？）

良く見れば張り紙が扉にしており、そこには一夏さんと秋篠宮く
んの名前も書いてありました。
まさかとは思いますが……。

『ほっ、どう千冬姉？』

『もう少し強くしてくれて構わない』

『へえ、一夏得意だったんだ』

『まあね、昔っから千冬姉にやらされていたし』

何でしょうかこの会話……。

女性一人＋男性二人で。気になります。

と、そこへ先ほど悲鳴を上げていたセシリアさんがひょこつと現
れました。

「鈴さん？　それに箒さんにルミナさん、こんなところで……」

再び鈴ちゃんがシイッ！！　と抑え込みが入る。

私と同じようにセシリアさんがモゴモゴしながら再び扉の向こうから声が聞こえた。

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。——んっ！　少しは加減しろ……』

『はいはい。んじゃあ、ここは……と』

『くあっ！　そ、そこは……やめっ、つうっ！！』

『珍しい、千冬さんのこんな姿見るの』

『秋篠宮……見せ物では……くう』

『すぐに良くなるって。だいぶ溜まってるみたいだし、ね』

『あああっ！』

……………。

「こ、こ、これは、一体、何ですの……？」

何を問うているんですかセシリアさん。
この会話を聞いて何も感じないのでですか？
とは言うものの、答えにくいなあ。

「……………」

「……………」

鈴ちゃんも箒お姉様も黙ってるし……って何でそんな沈んだ表情
なんですか？

何か通夜でもあったかのような空気になってますよ。

『じゃあ次は——』

『一夏、少し待て』

おおよ？ 織斑先生の声音が変わりましたね。
もう少し扉に近づけば。

この行為がまさかあんなことになるなんて……。

バンッ！！

「」「」「へぶっ！」「」「」

ドアに顔面をおもいつきり強打されました。
いきなり過ぎて、四人とも女性としてはあるまじき声を響かせて
しまった。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんは、織斑先生……」

「さ……さようなら、織斑先生っ!!」

脱兎の如く逃走劇を繰り広げようとしたけど既に遅し。

私と鈴ちゃんは呆気なく首根っこを取られ、箒お姉様とセシリア
さんは浴衣の裾を踏まれて南無。

やっぱり、IS戦はもとより、織斑先生に生身の肉弾戦で勝とう
など言語道断であった。

「盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

「」「」「えっ?」「」「」

予想外の言葉に思わず四人そろって素っ頓狂な声を上げてしまっ
た。

「ああ、そうだ。他の二人――ボーデヴィツヒとデュノアも呼んで来い」

「「は、はいっ！」」

首根っこを解放された私と鈴ちゃんは有無を言わず駆け足で二人を呼びに行くことになった。



「はぁ、酷い目に遭った」

「私のセリフだよ鈴ちゃん、そもそも鈴ちゃんと箒お姉様が聞き耳を立ててるから悪いんだよ」

元を正せば、二人が黙ってあんなところに居たこと自体が問題だったんです。

まあ、あんな会話があったら聞きそうですけど……。現に聞いちやったけど。

「はぁ？ アンタも同罪でしょ？ そもそも、私は盗み聞きする気はなかったんだから！！」

「鈴ちゃんこそ言い逃れしようとしてるじゃん！！」

二人でああだ、こうだ言っている最中に織斑先生から召集対象になった、シャルさんを発見。

「何やってるの二人とも」

「シャルさん、ちょうど良いところに居ました」

「アンタ今暇よね？ てか暇でしょ？ 私たちと一緒にいてきて」

「えっ？ おっ？ どういうこと。ねえ、鈴、ルミーナ！？」

はい、シャルさん強制連行。
さて次はラウラさんですね。
って、言ってるそばからピンポイントで居るじゃないですか。

「何をやっているのだ貴様らは」

「ラウラ助けてよ、二人ともいきなり連行しよう」と

「うるさいわね、織斑先生からの命令なのよ、仕方ないでしょ」

「教官の命令？ 何か問題でもあったのか？」

「問題と言えば、問題なんですけどね。そう言うことで、ラウラさんも一緒に来てください」

「うむ、教官が呼んでいるなら同行しよう」

やっぱり、織斑先生の事になるとラウラさんは有無を言わず付いてきてくれるから楽ですね。

「ルミーナ、何か言ったか？」

「いえ、何でも」

伊達に織斑先生に鍛えられただけはありますね。読心術も身に付けているなんて。

それはともあれ、無事二人とも確保です。

早く戻らないと、また何を言われたものか。

私と鈴ちゃんはシャルさんとラウラさんを半ば担ぐ状態で織斑先生のもとい、箒お姉様が待っている部屋へと足を急がせた。

△▽△▽△▽△▽△▽△▽

グラナドスと凰がデュノアとボーデヴィツヒを呼びに行っている間、オルコットと篠ノ之は部屋でじーっとしていた。

オルコットは一夏が約束していたらしいマッサージをするため布団に横になっていた。

篠ノ之はと言うと、どうも落ち着かない。

見慣れた顔ぶれなはずなのに変に緊張してしまっている。

「どうした篠ノ之？」

「……………」

「おい、篠ノ之？」

「ん、何だ秋篠宮」

「大丈夫か？ 何でそんな固まってるんだ」

問い掛けても、篠ノ之は何でもないとしか答えずまた黙り込む。
そんな中、オルコットは一夏のマッサージにうとうとし始めていた。

だが、こんな静かな空間も一人の女性によりヒートアップする。

「ひやあああつ！？」

オルコットがいきなり声を上げた。

俺は外を眺めていたが流石にその声に気付き振り返るとオルコットがとんでもないことになっていた。

「おい、マセガキめ」

千冬さんがオルコットのお尻を鷲掴みした後、浴衣の裾を持ち上げて中を詮索していたのだ。

子供がイタズラをするように笑みを浮かべていたが、確実にジャ

ツカルを狩る豹のような表情だった。

「しかし、歳不相応な下着だな。それに黒か」

「きゃあああ、な、何してるんですか先生っ!!」

一夏は目を逸らしながら硬直し、篠ノ之も流石に驚きの表情を見せ口をパクパクさせていた。

もちろん俺も、その光景を凝視するわけにもいかず顔を逸らす。てか、千冬さんは男の居る面前で何をしだすんだよ。

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ、十五歳」

「い、い、いつ、インコっ……!?!」

「冗談だ。——おい、聞き耳を立てている四人。そろそろ入ってこい」

????

俺は全く気付かなかったが、扉の向こう側に誰かが居るのか、千冬さんが声を掛ける。

そうすると扉が開き、少し顔を赤らめるグラナドスたちがノソノソと入ってきた。

どこまで凄いだこの人は……。

四人は千冬さんに好きなどころに座れと言われ各々相手いる場所を探し座る。

オルコットも少し乱れた、正確には乱された浴衣を整えながら五人の方へ移動し腰を下ろす。

一夏は疲れたと言葉を漏らしながら俺が座っている向かいにある座椅子に腰を下ろしていた。

「一夏、お前はもう一度風呂に入ってこい、汗臭くては困る。元、お前も悪いが一夏に付き合ってやってくれ」

「良いよ、風呂くらい一人で入るし」

「お前は男を一人置き去りにするのか？」

「千冬さん、俺はここに居座り続けると死ぬとかですか？」

「近からずとも遠からずだ」

「一夏、風呂行くぞ」

冗談じゃない、女性がたくさん（と言っても六人）居る中で一人は嬉しい反面、居づらくて仕方ない。

それに死ぬ確率のあるところに居るよりかは、男同士でも一夏と風呂につかってる方が幾分かマシだ。

「じゃあ、もう一回風呂行ってくるよ。皆もくつろいで……まあ難しいけど」

と言葉を残して俺たちは二度目の温泉へと向かった。



一夏さんと秋篠宮くんが出て行った後、私たちは黙り込んだ。
それもそうでしょう、何たって目の前には教員モードが外れているとは言え、あの織斑先生が居る訳で。

「おいおい、葬式か通夜か？　いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

私も会話くらいは一对一でしたことがあるけど、それは必要な会話であって今のようないきなり空気でもない。

それに、日常会話と言っても何を話せばいいのか……。

そうこう考えている間に織斑先生が部屋に備えてある冷蔵庫を開けて中から飲み物を人数分取り出した。

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。と言ってもここにあるものの中からだがな。篠ノ之、何がいい？」

お姉様を名指しお茶やら、オレンジジュースやらを並べていく。咄嗟に名前を呼ばれたせいか、お姉様も驚いて困惑状態になっていた。

並べられた飲み物。各自で交換しろと言われたけど、特に問題がなかったのか私たちは目の前に置かれた缶を手に取り開けていく。

「い、いただきます」

私たちは全員同じ言葉を口にして、ちょびつとずつだけ飲み物を口にした。

飲み物が喉を通ったことを確認した織斑先生はニヤリと笑みを浮かべていた。

な、なんで微笑んでるんですか。

「飲んだな？」

「は、はい」

「そ、そりゃ飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

口封じ? 一体何の……。

その矢先に、織斑先生は冷蔵庫から私たちのとは異なる缶を取り出した。

あれって、缶ビール？

プシュッ！

と景気のいい音を立てて飛沫しぶきと泡が飛び出した。それを一気に飲みこむかのように織斑先生は唇で受け取った。そしてそのままゴクゴクと喉を鳴らした。

「……………」

その光景に私たちは声が出なかった。
出るわけじゃないですよ。こんな今まで見たことのないものを見せられたらそうなります！！

「かああー美味しい」

仕事の後のおじさんのような台詞をこぼす織斑先生。

何だろう、とっても幸せそうな表情をしていることにまたしても驚きを隠せない。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……それは我慢するか」

未だ開いた口が塞がらない状態の私たち。

昔の織斑先生を知るお姉様、鈴ちゃん、ラウラさんですらこの光景に驚きを隠せないでいる。

一番は、ラウラさんだった。人一倍瞬きの回数が多かった。

余程、この光景が信じられないんだと思った。

「おかしい顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも何か？ 私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

織斑先生……笑えない冗談はやめてください。

私たちはそんなことはないと言葉を必死になって伝える。

そこにシャルさんが一言。

「仕事中なんじゃ……？」

そう言われれば、かなりラフな状況ではありますが、教員は基本的にまだ職務中……。

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

と、私たちが手に持っている缶をざっと流し見る。

なるほど、そういう意味で”口封じ”だったんですね。他のみんなも納得したかのように軽くため息を吐いた。

「さて、前座はこのくらいでいいだろ。そろそろ肝心な話をするか」

早いものでもう二本目のビールをラウラさんから受け取り流し込むかのように飲んでいく。

「ただ飲むつもりですか。」

「まあ、肝心と言ってもグラナドスにとってはあまり肝心ではないがな」

私には肝心じゃない？ 一体何の話をするつもりなんでしょう？

「それはともかく。お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

あいつ？

織斑先生はあいつと言っていました、恐らく、と言うよりもここであいつと言ったら一夏さんしかいない。

仮に秋篠宮くんだったらわざわざこのメンバーを呼ぶこともないはず。

お姉様から順に一夏さんに対しての思っていることを口にしていく。

お姉様、鈴ちゃんは幼馴染としてと言うことを伝え、セシリアさんはクラス代表だからもっとしっかりして欲しいと。

素直に言葉を発したのはやっぱりシャルさんでした。

「僕——あの、私は……やさしいところ、です……」

ぼそぼそとした感じの発言でしたが、何か真摯な響きがこもっているように感じました。

その言葉に織斑先生が口を開いた。

「ほう。やさしいところか。しかしなあ、あいつは誰にでもやさしいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちょっと、悔しいかなあ」

あははと照れ笑いしながら、シャルさんは赤くなった頬をパタパタと手で仰ぎ始めた。

「お前はどうか、ボーデヴィツヒ？」

先ほどからずっと黙り込んでいたラウラさんを名指した。

ああ、ううと言いながらラウラさんが言葉を紡いだ。

「つ、強いところが、でしょうか」

「いや、弱いだろ」

有無を言わず否定する織斑先生。
がしかし、ラウラさんはその反応に対して食ってかかった。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

ラウラさんが反論したことが珍しかったのか織斑先生は苦笑しながらそうかねえと口にした。

そして最後に織斑先生は私の方を見てきた。
まさか、私も何か答えろってことですか……私にとっては肝心じゃないって言いましたよね？

「グラナドス、一応お前にも聞いておこう。一夏の事どう思う？
それとも一夏より元の方が気になるか？」

「な、なな、何でそんなこと聞くんですか!？」

言えるわけじゃないですか。

実姉とお姉様が目の前に居るのに、お姉様に蔓延る害虫何て言えるわけがないじゃないですか!!

それに、何で秋篠宮くんの名前がそこで出てくるんですかっ!？
意味が解らないです。

「何、一夏とつるんでる割にはあまりあいつに対しての態度が変わ

らないなと思ってな。それよりかお前は元とつるんでる方が楽しそうだからな」

勝手に何を言うんですか!!

そんな訳あるわけじゃないですか。

そ、そりゃ一夏さんよりは秋篠宮くんの方が接しやすいとは思いますが……って何考えてるんだろ私!!

私はお姉様一筋何だから、邪念は消し去らないと。

「うむ。まあいい。悪いな急に振って」

ホントですよ全く……。

てか、みなさん何でそんな目で私を見るんですか。凄くその生暖かい視線が怖いです。

「確かに、お前たちが言うようにあいっはいいところがある。それに役にも立つ。家事、料理もできるし、マッサージも得意だ」

そうだろ、オルコット？ と話を振りセシリアさんの反応を見てニヤリと笑みを浮かべる。

ホントこの人は、人を弄ることが好きなんですね。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

今何と言いましたか？

確実に弟をものとして差し出しましたよね。流石に私もこの言葉にはみんなと一緒に「えっ！！？？」と声を上げてしまった。

その言葉にラウラさんが口を開く。

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

ええ。と言わんばかりの表情を見せるお姉様たちに私も思わず苦笑する。

やっぱりそうなりますよね。

「女なら、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

三本目のビールを口にしながら、ものすごく楽しそうな表情を浮かべる織斑先生だった。

△▽△▽△▽△▽△▽△▽

合宿二日目。

今日は昨日の自由時間とは変わって、一日かけてISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。

特に私たちのように専用機持ちは大量の装備が待っているのだからそれぞれは大変です。

とは言うものの、私のISはプロトタイプとは言え、第四世代型。
後付武装を初め追加装備は無いですけどね。

今はと言うと、珍しく遅刻をしてきたラウラさんが織斑先生からの指示で「ISのコア・ネットワーク」について長々と説明をしているところだ。

「いいだろう。以後気をつけるように」

ラウラさんはその言葉にホッと胸を撫で下ろし、はいとだけ応えて整列する。

今更ながら、一学年が全員並んでいるからか思わず奥の方までのぞいてしまった。

ちなみに、現在はIS試験用のビーチで、四方を切り取った崖に囲まれたところに居ます。まるで秘密基地に居るかのような感じです。一番それを思わせるのが、大海原に行くために必ず一度水面を通る必要のある水中トンネルがあるところだ。

私は専用機持ちとして、鈴ちゃんと一緒に他の専用機持ちのみんなのところへと向かう。

その道中見つけたお姉様は打鉄用の装備を運ぼうと他の女の子と一緒に居た。その時織斑先生からお姉様に声がかかった。

「篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

お姉様は運んでいた打鉄用の装備と一緒に居た女の子に渡し、こ

ちらへと駆けてきた。

いやはや素晴らしいあのたゆんだゆんなおっぱ……ゲフンゲフン。
な、何故でしょう。急に背中に悪寒が走りました。今日はまとも
にしておいた方が良さそうです。

「篠ノ之。お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~~~~~ん!!」

ずどどどどど!!

と砂煙を上げながら人影が走ってくる。とにかく早かった。むしろ人間の領域を超すかのごとく早かった。

恐らくISか何かを装備しているからだろうと思うけど。
てかここって関係者以外立ち入り禁止ですよね?

「とうっ!!」

崖からものすごい勢いで疾走してきたその人は、戦隊モノのヒー
ローのように飛び、そして地面へと着地した。
完璧不法侵入じゃないですか。

「やあやあ! 会いたかったよ、ちーちゃん! さあ、ハグハグし
よう! 愛を確かめ——ぶへっ」

織斑先生に飛びついたその女性は先生の強烈なアイアンロックで顔を思いつき掴まれる。

しかもよく見れば指が顔面に食い込んでいた。相変わらず手加減を知らない人だ。

「うるさいぞ、“束”」

ぐぬぬ、と悔しい表情を見せながらも意図も簡単に織斑先生のアイアンロックから解放された束と呼ばれた女性。

……？ はて、束？

どこかで聞いたような無いような。

その束と言う女性は箒お姉様の方へと向かう。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。大きくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。それに日本刀の鞘で叩いた！ ひ

どい！ 箒ちゃんひどい！」

何なんでしょうこの女性は……。

どことなく箒お姉様に似ているようなそうでないような。

ともかくお姉様を狙う人はたとえ誰であろうと抑える！！

と意気込んだのは良いものの、この後知らされる真実に私は4つほど残機を失うことになる。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー。めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

いきなりこちらに振り向くなり微妙な笑顔で両手を胸元で二、三回振り、そしてまた織斑先生たちの方に向き直る。

天才の束……。

ようやくここで私は気づいた。

今もああして、山田先生にちよっかいを出し、その制裁を入れる織斑先生。

制裁を喰らいながらも、ひよいひよいとすり抜けて行く身のこなし方。

それに、あの他人に全く興味のないあいさつ……。

あれは、正真正銘、束博士だ……。

「おや？ そこに居るのは……」

私の事に気付いた東博士がもの珍しそうにこちらを見ていた。
ちなみに、私は東博士の事を知っていますが、東博士は私をの事
を知っているかと言われるとほとんど知らないです。かろうじてス
ペインの試験操縦者テストパイロットと言うことくらいかと。

「誰だっけ？」

やっぱり。

「お久しぶりです、東博士。その節はどうも」

「東、グラナドスだ。いい加減関わった人間くらい覚えろ」

「めんどくさいなあ」

めんどくさいって……。まあ、わかつては居ましたが、対応が対
応だと傷つくな。

一応、“あなた”が関与したISに乗ってる訳なんですから。
てか、今更ながら、箒お姉様が東博士の妹とはつゆ知らず私は何
て事を！？ 後で今までの無礼をわびた方が良いかな……。

「それで、頼んでおいたものは……？」

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あ

れ！」

きれいに腕を直上に上げた束博士の言葉につられ私たちを含むそこに居た生徒たちが一斉に空を見上げる。

澄み切った青い空。珍しく雲も少ない。ただ広々とした大空が続いているだけですけど何が？

と思った矢先、銀色に光る物体が太陽光を反射させながら落下してきた。しかもものすごい速さで“私たちの居る場所”目掛けて落下してきた。

そして……。

ズドドドーン！！

何とも物騒な金属の物体が私たちの目の前に落ちてきた。しかも狙ったかのように箒お姉様の前に“着地”した。

銀色のそれは静かに佇んでいるだけであったが、突如煙を吹き出し、壁になっている部分が上下左右に展開されていく。

そしてついにその中身があらわになる。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

名前に相応しいと言うか、むしろ名前のまんまな紅色に輝く装甲に包まれた機体が動作アームにより姿を現す。

正直な感想を言うと本当に綺麗だった。

私が期待に見惚れている中、束博士は箒お姉様と成り立っているのかわかりにくい会話をしながら初期化と適正化を終わらせていった。

相変わらず早い。

人数がいればそれなりに早く処理を完了させることができるけど、多ければ良いってわけでもない。

だけど、束博士はそれをたった“一人”で完了させる。伊達に天才と呼ばれていない。確かにISの生みの親であるため初期化等の設定など造作もないだろうけどそれでも早すぎる。

一番の驚きはやはり情報処理速度。

人間の能力を凌駕した頭脳……。マルチタスク、1回の動作で複数の事を行うことができる。束博士は一種のコンピュータ、いやちよいとそこの古いコンピュータよりも確実に上回っている。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！ お姉ちゃんか！」

「それは、どうも」

箒お姉様、相変わらず素っ気ない気もする。

せっかく姉に会えたんだったらもう少し喜んで良いものだけど

……。まあ理由が理由だし仕方ないかな。

「ふんふん♪ もう少して終わるよ」

「相変わらず束さんの技量には驚かされる」

「あつ、いっくん、白式見せてえ。東さんは興味津々だよ。それと……ん」

「ルミーナです東博士」

「そうそうルミーナ……は良くて、そっちそっち」

東博士は私ではなく首に提げてるクロスチェーンに興味を示していた。

やっぱりこっちですよねえ。

「バンデリリエーロですか？」

「そうそう、オレハが頑張って作ったみたいだから少し見てみようかなと」

珍しいこともあるものですね。

ほとんどの事に興味を持たない人でも、流石作成しただけのことはありISは誰が持っていても興味示すんですね。

「そうだ、東さん。丁度良かった」

「何かねいっくん？」

「ルミーナのISなんだけど、第四世代型のプロトタイプって話だ

けど、束さん知ってる？」

「ちっ、ちっ、ちっ。甘いよいっくん、チョコレートに練乳をドロツドロにかけてるくらい甘いよ」

うええ……。何か想像したら気持ち悪くなってきた。

チョコに練乳って。激甘にもほどがある。確実に甘党でも嫌がりますよ。

「スペインのオレハって言ったら無駄にISの知識が高い人間の集まりなんだよね。まあ興味はないけど。そこがIS作ってるって情報はもともと聞いてたのと、何だかんだで関与……。モガっ!？」

「余計なことをペラペラと喋るな。お前の発言は下手をすれば世界が動く」

「うー。ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね」

「やかましい」

織斑先生の強烈なチョップがめり込む勢いで束博士の顔面を直撃する。

普通の人なら耐えられない筈なんですけど……。

しかしそのチョップをモロに喰らっているにもかかわらず束博士は笑ってそれをやり過ごす。

鼻血出てます鼻血。

と、私が溜息をついてる中、さささっと私の目の前まで束博士が

接近していた。

「ううわっ」

「んー、シクムスの調子も良さそうだ。わかっているとは思うけど整備だけは怠らないように」

「あっ……、はい」

急にシステムの事を指摘し、ただそれだけを伝えて再び箒お姉様の元へと軽快な足取りで向かっていった。

咄嗟の事ではいと返事したものの、シクムスを整備って……どうやるの？

東博士が箒お姉様の元へ向かう途中、セシリアさんが声を掛けていたけど、案の定ものすごい勢いであしらわれていた。

ホント身内にしか興味ないんですね東博士。

後で聞いた話だけど、あれでも大分マシになったようです。何でも、ことあるごとに織斑先生から訓練されていたとか。

「じゃあ、早速試運転も兼ねて飛んでみようか」

各種コンソールに接続されていたケーブルが紅椿から取り外され、全ての設定が完了する。

わあ、すごいな。お姉様にしっくりきてると言うか恰好よさ過ぎですー！！

私のバンデリリエーロも赤色にしようかなあ。

てか早っ！？ 何ですかあのスピード！！

束博士が言うように全スペックを今あるISを上回ってるのが実際に見てわかる。

一夏さんの白式、私のバンデリリエーロ。第四世代型のIS（私のはプロトタイプだけど）よりも優れてるのではないかと思っ:majukuraiddatta

「次は刀を使ってみよー。右が『雨月』あまつぎで左のが『空裂』からわれね」

そう言うコンソールをもの過ぎ速さで叩き、箒お姉様に情報を渡す。

それを受け取った箒お姉様が両腰に提げられた日本の刀を抜く。スラッとして刀を抜く辺りは流石と言うか何と言うか、うん。凄く綺麗で格好いいです！！

ちなみに束博士の説明でいくと、右手の雨月は対単一仕様の武器で、打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続で敵を蜂の巣にできる代物とのこと。また射程はアサルトライフルレベルとのことだけど、紅椿の機動性をもってすればスナイパーライフルの間合いくらい造作もないとのこと。

箒お姉様は束博士の説明に合わせているかはわからないけど、雨月を持った右腕を左肩まで持って行って構える、えーっと確か、篠ノ之剣術流二刀型・盾刃じょうじんの構えだったかな。攻防どちらにも転じやすい構えを取り突きを放った。

たった一突きで雨月の周囲に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、そこから順に光る弾丸となって漂っている雲を貫いて穴をあけて行った。

「おお、いいね、すごいね流石箒ちゃん！ 次、空裂行ってみようか」

空裂。雨月の対となる刀。

こちらは対集団仕様の武器で、斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーを振った範囲に自動で展開してぶつける超便利な代物とのこと。と説明をしている中で、束博士はホイと十六連装ミサイルポットを呼び出す。光の粒子が集まって形を成すと、次の瞬間一斉射撃を行った。

「「箒（お姉様）！！」」

思わず、その場に居た一夏さんと声を合わせてお姉様の名前を叫んだ。

不覚……、なんで被るんですか！！

ってそんなことはどうでもいいんです！ 今はミサイルの行く先。私は思わずバンデリエーロを起動させそうになったが、箒お姉様はそのミサイルに体に向け表情を引き締める。

「――やれる！ この紅椿なら！」

そう言葉にして、空裂を右脇下に構えそれを一回転するように振った。

あの雨月の際に見せた赤色のレーザー光が帯状になって広がり、飛来した十六発のミサイルを全弾撃ち落とした。

凄いの一言だった。

普通あんな勢いで飛んできたミサイルをいくらお墨付きの性能を誇ったISとは言え、全弾迎撃させるのは異常である。今回ばかりは箒お姉様がなぜか怖く見えた。

周りのみんなも凌駕されたスペックに驚愕し、そして魅了され言葉が出ない状態に陥っていた。東博士は満足したのか笑みを浮かべている。

「……………」

ただ一人、織斑先生だけは驚愕も魅了もされず、また笑みも浮かべていなかった。表情は鋭くまるで敵を睨むかのような視線だけが嫌に気になった。しかもそれは箒お姉様と紅椿ではなく、それをここに持ち込んだ張本人、東博士を。

「たっ、た、大変です！！　お、おお、織斑先生っ！」

いきなりの山田先生の声に、織斑先生は東博士に向けていた鋭い視線をやめて向き直した。

人のことを言えないけど、いつもバタバタしている山田先生が今だけはいつもと違っていた。

何て言えば良いんだろう慌て方が尋常ではなかった。

「どうした？」

「い、こっ、これをつ！」

織斑先生が渡された小型端末を見て表情を曇らせた。

私は気になりその画面をそつと覗いた。そこには驚くべきことが記載されていた。

試験稼働ISの暴走……

特定任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……

また厄介なことになりそうです。

）第五話 常夏の青春と紅き翼 f i n .
（

第五話 常夏の青春と紅き翼（後書き）

如何でしたでしょうか？

改めて白河シンジでございます。

ホント、更新遅くなって申し訳ないです。

ユーさんから丸投げされたウニボール……もといウイニングボールをようやく打ち返せます！！

さて、何とかオーシャンズイレブンを完了させ、その境界線の上に立ち（シン・レッド・ライン）に突入です。

そして福音戦もやってまいります！！　と言いたいところですが、今回はご存じの通りルミナ視点での動きになりますので、福音戦になるかは次のユーさんにまわしちゃいましょう。

次こそは2週間で更新したいです。

では、またお会いしましょう★

第六話　そしてルミーナは動くーシン・レッド・ラインー（前書き）

というわけでやっと更新に持ってこれたこの作品。

お待たせしていた方申し訳ないです。

リアルが何分忙しくて……。

3週間スパンが難しい。

まさか2か月近くかかるとは。ほんとうにごめんなさい。

ようやく更新できたので楽しんでもらえると嬉しいです
では☆

第六話　そしてルミーナは動くーシン・レッド・ラインー

「専用機持ちかは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

なにやら神妙な感じですよ。

周りに居た生徒のみなさんも何故か不安そうに織斑先生たちを見えています。

そのことに気付いたのか、先生たちは手話で会話をしました。

(…………軍専用の暗号通信ですね。私の国とは違ってわかりづらいです。お姉様通信なら一言一句間違えませんが☆)

と私はどうでもいいことからとても重要なこと。

お姉様と一緒に風呂をどう楽しむか思案しようと思います。

敵だったらどうするって？

そんなの決まっています。お姉様の裸を見る方が大事に決まってるじゃないですか！

お、お姉様の裸……。はあはあ、興奮してきましたああああ！

(つてあれ？　なんですか、こんなときに)

私は至福の妄想タイムに入ろうとした時でした。

いきなりスペインの軍事研究施設からの暗号通信です。
何か嫌な予感がします。

ですが出ないと怒られます。

正直めんどくさいですが……、出るしかありませんね。

私は気づかれないように自然とその場から離れ、通信を取りました。

外に出るまでに……。

織斑先生がしゃべっていました。

「全員、注目！」

千冬さんの一言で全員が千冬さんを見た。

私もつい止まってしまいました。

通信来てるんですけど、少しくらいいいですよね？

だって今出て行ったら確実に私殺されます。

「現時点でIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテストは稼働中止。各班、ISを片づけて旅館に戻れ。連絡があるまで各自自室内待機するこ。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

女子のみなさんが慌ただしくなります。

それはそうでしょう。

いきなりのことなんですから。不安に思うことだってあります。

「とっとと戻れ！ 以後、許可なく室外に出た者は我々で身柄を拘束する！ いいな！！」

その言葉でみんなが一斉に動き出しました。

やはり千冬さんは凄いですね。おっと、連絡があったのでした。

「専用機持ちはここで待機。私の指示のもとで動け」

「「は、はい！」」

（室外）

「はい。ギイエルミーナ・グラナドスです」

（グラナドス、なぜすぐ出ない？ このコールは緊急だと教えただらう）

うわあ、やっぱり室長でした。

おっと、オレハ社の社長まで……。

一体なんなんでしょうか。

「すいません、織斑千冬に止められていまして……」

（ちっ、ブリュンヒルデか。まあいい。グラナドスに緊急任務を与える）

嫌な予感しかしませんね。

お姉様の裸を見るという大事な用があるのに。

「なんででしょうか？」

（今より、アメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS
シルバリオ・ゴスベル
『銀の福音』の捕縛・もしくは破壊しろ）

「ええええええっ!？」

全く意味が分かりません!

なんでいきなり敵国に喧嘩売るようなことするんですかっ!?

みなさんにはわからないでしょうね。

この異常を。

だから私がわかりやすく教えますね。

つまり、私が大事な筈お姉様に喧嘩売ると同義ってことです!
まったくもってナッシングです!

（聞こえなかったのか? いますぐ『バンデリエーロ・マタドール可憐なる闘牛』で第四世代

型試作機の実力をみせしめてこい)

「え、えと……室長？　IS学園にはもうお披露目しちゃいましたけど、ここでさらに披露するのですか？」

(何が言いたい？　ギィエルミーナ・グラナドス)

「だってこの子の保護が目的でその操縦者である私がこの学園に送られてきたんでしょう？　だったら逆に福音^{ゴスペル}相手に見せるとなると全世界に知れ渡りますよ？」

だってそうですね？

そりゃIS学園でも見せちゃいましたけどこの学園はこの国にも属さない特殊学校。

だからこそ極秘ISでも外に知れ渡ることとは無い。
そのために室長は私をここに連れてきたんだもん。

(簡単なことだ)

「えっ……？」

(秘密にする必要がなくなったからだ)

「ど、どういふことですかっ!？」

(それはな………む?)

「どうしたんですか？」

（上層部からの召集がかかった。話は後だ。グラナドス、好きに暴れる）

プツンッ、と通信が切れました。

なに、かっこよく終わらせてるかはわかりませんが……。

室長のそのお腹の出具合が台無しになってますよ？

まあいいですけど。

「はぁーあ。といってもどうやって千冬さんの目を盗めばいいんだろう……。もし盗めても私死ぬかもだし」

「だったらそんな問題は私が解決してあげるよっ！」

うわぁっ!？

なんですか、このウサギ耳はっ!

いや、違うこのバニーさんはっ!

「って束博士ですか。いつの間にいたんですかっ!？」

「ノンノン♪ そんなの決まってるじゃないっ! 箒ちゃんのお胸のサイズくらい前からだよっ!」

「なるほどっ!」

いいい！」

大声出して走っていききましたよ？
それ言ったらばれるんじゃない？……。

「ちーーーーーちーーーーーんっ！　ラー
ーーーーブーーーー♪」

「こ、こら束！　何をするっ！」

あ、大丈夫だ。

なんかそんな気がしてきました。

「さてと、好きに暴れて良い、ですか。どうせ勝ち目なんて私には
ないですし……本国の命令だしがんばってみようかな。もし勝った
ら奇跡かも」

ってあれ？

待ってください。

仮に私が勝ったとしてみましょう。

あの銀の福音に勝てば箒お姉様は……。
シルバリオ・ゴスペル



く妄想く

「ルミーナ、私は自分より強い人が好きだ」

「えっ？ それはどういうことですか？ お姉様」

「鈍感だな。いつも自分から言ってくるくせに……。可愛いやつだ」

「お、お姉様……っ！！」

箒お姉様はそっと私の頬に手を触れます。

「あの銀の福音を倒したお前こそ私の相手に相応しい。これから一生私の隣に居てくれるか……？」

「よ、よろこんでっ！ 箒お姉様っ！」

く妄想終了く

「やばいです！ かなりテンションあがってきましたよっ！ こりやもうやってやるです！」

テンションあがりまくりです！
私の本気で倒してやるです！

「つてまあ難しいのはわかってるんだけどね、あははは……」

わかってますよ。

ただの空元気ですよ。

私の実力は代表候補生の割に低いってのぐらいわかっています。
だけど……。

こうなった以上やるしかありません。

「ねえ、がんばろう……。マタドール」

私はスカートの横で銀に煌めくシルバーチェーンを優しく撫でる。
だって大事な私の家族だもの。
バンデリリエーロは私の声に反応し、銀色に光を点滅させる。

「じゃあ行くよ」



「あれ？　そういえば」

ふと俺はもう一人の仲間であるルミーナの姿が見えないことに気付く。

「ん？ どうしたんだ一夏？」

「元、ルミーナを見なかったか？ 確か集合の時は居たと思うんだが……」

さっき突然の束さんの訪問……。

もといインパクトに意識をそっちに持って行っていなかった。友達を忘れるなんてダメだな、俺。

「そういや……珍しいな篠ノ之がこっちに居るのにあいつが姿を現していないなんて」

「箒と仲良いもんな。なあ、鈴は知ってるか？」

「あたしが知ってるわけじゃない。だけど心配ではあるわね」

「だったら呼んでみたらどうか？」

呼ぶ？

シャルの突然の案に俺はちょっとよくわからなかった。

「どうやって呼ぶんだ？ シャル。ルミーナと通信か？」

「ううん。まあ通信より精度の良いのがあるよ。ねえ、一夏。箒の肩に手を置いてみて」

「ん？　それがなんの呼ぶにつながるんだ？」

『ああ、なるほど』

俺と箒以外は何故かみんな納得している。

まあせっかくの案だしシャルに乗るか。

とりあえず俺は箒の肩に手を置いた。

何故だか箒は頬を赤らめたが……。

嫌だったんだろうか？

「うう……／＼／＼／」

それから時間がたっても何も起こらない。
一体何してるのか俺にもわからないが。

「……おかしいな、本当にルミナのやつはどこ行ったんだ？　こ
うなったらありえない速度で現れるだろ？」

「ちょっとこれはまずいわね。ラウラ、なんとかならない？」

「そうだな、とりあえず……」

「っ！　織斑先生！」

「どうしたっ！」

突然オペレーターの的なことをしていた山本先生が珍しく大きな声を上げた。

何かあったのだろうか？

「ISが1機が福音に向かっていています！」

「なんだと！　どこの機体だ、山本先生」

「照会します……。照会完了。映像出します」

画面に映像が映った。

それを見て俺は目を疑った。

あれは俺たちは見たことがある機体。
ましてや仲間の機体なのだから。

「バンデリリエーロ・マタドール……。ルミーナがどうして……」

「くっ、あのバカ勝手に先走ったな……。専用機持ち！」

『はい！』

「ただちに……」

「ちーーーーーん！ちゃーーーーん！」

千冬姉が何か言おうとした。

けどそれは束さんによって憚れてしまった。

というか何故この近い距離で大きな声で呼んだのだろうか？

「束……。今は緊急事態だ。スクランブル関係者以外ここから出ていけ」

「私だって関係者だよー☆ だってIS作ったじゃん、ちーちゃんのバカァ！」

「……………織斑、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰、オルコット、篠ノ之。すぐに動けるな？」

あ、無視することに決めたみたいだ。

でも確かにルミィナの単独飛行は危険だ。
仲間を見捨てることなんて出来ないしな。

「いつでも行けます、教官」

「わたくしもですわ」

「当然わたしも」

「行けます」

「僕も大丈夫です」

「……行けます」

「よし、いますぐ……」

「ぶうー。ちーちゃんは無視する気だなあ！　いいもん！　だったら私は独り言言うもん！」

とことん無視するきだな、千冬姉。

「あの子も大変だよね。国の命令で“一人で”シルバリオ・ゴス
ペルと戦うなんて。これだから国家は……」

「なんだと……。どういことだ、束」

「わあーい☆　ちーちゃんが反応してくれた。ぶいぶい」

「はあ。束、さっき国の命令だと言ったな。このIS学園のことはお前も知っているだろう。学園の土地はあらゆる国家機関に属さず、いかなる国家や組織であろうと学園の関係者に対して一切の干渉が許されないという国際規約があることを」

「知らないよ。どうでもいいもん。でもま、そういうことって有名無実化。半ば守られてないことって多いよね」

「……………」

「まあどうでもいいよね☆ でもさ、ほら。私的にはいまあれが気になるのだよ☆」

束さんが指を指す方向。

それはルミーナのバンデリリエーロ・マタドールだった。

「第四世代型プロトタイプ。あの頭の固いオレハの人間がどこまでやったのか気になるし、そのパイロットにも少しね」

「お前……」

「それにほらほら。こういう機会をもとに人間って“成長”するんでしょ？ ちーちゃん」

「束、お前は……」

「まあ、少し見て行こうよ。どこまでやれるのかを。助けに行くのなら行ってもいいと思うけど」

「専用機持ち、いつでも行ける準備をして待機だ」

『えっ……』



「さてと……福音^{ゴスベル}さん。すいませんが私の相手をしてくださいませんか？」

銀の福音のパイロットさんからは返事はありません。

ですが交戦の意思が見受けられました。

だって銀の翼みたいなものを開けてこっちを見ているのですから。確実に臨戦態勢ですね。

——警戒、敵IS操縦者、ロックオン。戦闘モード移行。

「相手の攻撃方法はわかりませんが……マタドール、エストカード展開」

SHCMS^{シクムス}システムを搭載したバンデリエーロ・マタドールの唯一のメイン武装。

全方位に対し多角的に攻撃できるマルチレイドシステム。といってもこれかしか武器はありませんが（笑

「敵機、確認。迎撃モードへ移行。《銀^{シルバー・ベル}の鐘》、稼働開始」

「!？」

オープン・チャネルから聞こえるのは無機的で抑揚のない……。機械音。

だけど私はそこから明らかな敵意を感じた。
思わず後ろに下がりそうになるくらい。

「くっ、エストカード！」

多角的に攻撃できる数基のビット。
不規則に動かし、不規則に攻撃する。
相手を翻弄するための攻撃。
だけど……。

「なっ……！？ はや……」

ビットからのレーザー放出をわずか数mmの精度で避ける。
慣性制御機能を搭載しているISであっても難度の高い操作技術。
つまり完全にビットの動きを把握し、レーザーの射点を分析され
ていることにつながる。

「それにあの翼が急加速をしているんだね。一夏さんのイグニッション・ブースト瞬時加速より厄介ですね」

だって移動方向が一直線だけじゃないんですから。
性質が悪いです。
ですが納得です。この性能、操作技術。
重要軍事機密の意味がよくわかります。

まあ私のこのマタドールも軍事機密なのですが、如何せん私に
だ使いこなせていません。

そう考えるだけでこれはいい勉強になりますね

「それに多方向同時攻撃……。私のは全方位^{マルチレイド}多角的攻撃。因果な
ものかもしれませんね。ここまで似て非なる者は」

でも、こういう攻撃か正直名前だけでは想像つきませんね。
私と同じビットを使うのか、それともまた別のモノか……。
考えていても仕方ありません。
攻めるのみです！

「はあっ！」

EMを発動し、多角的に攻撃をします。
だけど、全て紙一重で避けられるばかり……。
これではレーザー固定型の短刀が使えませんね。
迂闊に接近できませんし。

「なかなか当たりませんね……」

ビットを呼び戻しますか。
^{ワンサイズ・アビリティ}
単一合成能力を使うなら今ならフルバーストで行けますし。
全“6”基のビットで。

大技を当てようとそちらに注意を向けたのが間違いでした。

そんな隙を銀の福音が見逃すはずはありませんでした。

「しまっ……!!!!?」

銀色の翼。スラスターであるそれが翼を広げるかのように展開される。

それであの大きかりな羽根の意味がわかりました。

“砲口”です。

一斉に開いた砲門を私に向けさせるため、翼を前方に展開。

次の瞬間。

幾重もの光の弾丸が撃ち出されました。

「くっ!!」

その弾丸は、高密度に圧縮されたエネルギーでちょうど羽のような形をしている。

それがISの装甲に突き刺さったと思うと、次の瞬間には一斉に爆ぜた。

爆発するエネルギー散弾。これが福音のメイン武装でしょう。

けど一番の問題は……。

「く、なるほどです。多方向同時攻撃、こういうことですかっ!」

答えは連射速度だった。

ありえないほどの連射が同時攻撃という名を冠し……。
無作為に放射されるのが多方向。

この攻撃に狙撃なんて必要ありませんものね。
何せ“当たれば爆発”するという最悪の攻撃方法を持っているのですから。

「あの翼、見た目以上に厄介です。こっちはエストカードで攻撃してるのに向こうは回避特化。さらに回避中にこの攻撃、反則ですよ」

弾道を見切って回避しながらもエストカードを操るのには相当の集中力が居る。

ましてやこの量。

正直捌ききれません。

何度か私のマタドールに攻撃が通ってしまいました。

シールドエネルギーもこれじゃ持ちませんね。

ですがっ！

「今日は何故か思った以上に調子がいいみたいです。あの超絶技巧の操作技術を“視させて”もらってコピーできそうなんですもの」

私の得意技、相手の技をコピーする。

それは相手の力量が高いほど、コピーするなんて高度な技術が必要です。

ましてやあの超絶技巧。

真似できるものではありませんが……。

何故でしょう、本家並みに出来るような気がします。

よくわかりませんが、私とマタドールが共振シンクロしているのかな？

「やってみて損はありませんね。行きますよ、マタドール」

無作為に放たれる福音の爆発散弾。

私は散弾に意識を集中させる。

最小限の動きで最高の回避を。

数mの範囲での完全回避。

次の動作につなげれる回避技。

散弾が近づく。

——行けるっ！——

何かが閃く。

その瞬間には私はマタドールを動かしていた。
数mの動きで。

一斉に襲い掛かる羽を私は完全に避けきる。

そのまま流れるように動きに逆らわず私はマタドールと空で踊る。
敵の散弾の軌道が視える。

バンデリリエーロの性能を存分に発揮できる。

そんな気がする。

だから……。

——この勢いに乗らせていただきます！——

福音さんの攻撃が止まりました。

私の攻撃のチャンスです！

私はすかさず放出型のレーザービットを収納。

すぐに固定型レーザーの短刀を2基、掴む。

そして。

イグニッション・ブースト
「瞬時加速です！」

あの時の一夏さんとの模擬戦で覚えさせてもらいましたこの技を使用します。

一夏さんの十八番ですがそんなの関係ないです。

宿敵の技を使うのは些か……いや、非常に……いえ、遺憾ながら使うことにしてあげました。

ありがたく思うがいいです、一夏さん！

とそんなアホなことばかり考えちゃダメですね。

機体制御に集中です。

幸いいきなりのトップスピードによる接近。

あの福音さんも判断に迷いが生じませんか？

「もらいましたっ！」

福音さんの間合いに入り込み、私も間合いに迫い込みました。

懐がガラ空きです。

一撃……いえ、二撃いただきます。

手に持った短刀を福音さんに向けて振るいます。

完璧です。
と思いました。

「…………っ！」

完璧に懐に入り込んだのに、相手の一瞬の判断を奪ったのに……。福音さんは瞬時に多方向推進装置と先ほどの超絶技巧で私の渾身の攻撃を難なく回避しました。

ショックです。

避けられるなんて……。

——想定範囲内です。むしろ狙い道理ですよ？——

お姉様が見ている（かもしれない）のに無様な恰好は見せられませんか。

見ていてください！ お姉様！

ルミーナのこの戦い方を！

私は手に持っていた固定型のレーザービットを瞬時に消すと同時に切り替える。

ラビットスイッチ

高速切替を始動。

放成型のビットを一瞬で……。

シルバリオ・ゴスペル

“銀の福音の両翼と前後”に計4基をすでに展開と同時に射撃。

レーザーが初めて福音に衝突する。

マタドールのセンサーでも確実に攻撃が通ったことがわかる。

「予め逃げる方向を予測してそこに隠していたのが機を照らしましたね。……にしてもほんと私、今日どうしたんだろ？」

それにバンデリリエーロ・マタドールも。
ここまで私に答えてくれる。共振シンクロしてくれる。



「す、すげえ……。グラナドスのやつ一夏とやったとき以上に強いじゃないか」

「押しているな。完全にルミーナのペースだ。いや、違うな。自分のペースに巻き込んだ、が正しい」

「どういうことだ？ ラウラ」

「言葉のまんまの意味だ。一夏、私の嫁ならそれぐらい気付け」

いや、いくら一夏……ううん、一夏じゃ気づかないんじゃないか？
というか俺もよくわからないが。

「僕ラビッドスイツチの高速切替イグニッション・ブーストに一夏の瞬時加速。あの時以上に使いこなしている」

「でも、ここ最近のルミーナさんはおかしいですわね。あの一夏さんの模擬戦から何度かわたくしと対戦しましたが、今みたいにはありませんわ」

「あたしもそう思う。確かに実力はあるのは認めるわ。だけど、ここ最近のルミーナはおかしい。いくらムラがあるといってもあの操作技術の飛躍的進歩はありえないわよ」

「まるで……戦闘で飛躍的な“成長”をしているみたいない感じだな」

デュノア、オルコット、凰、篠ノ之と順に声を上げていく。

みんな画面を食い入るかのようになっている。

正直、俺はさっきから変な胸騒ぎしかない。

それにさっきまで騒がしくしていた篠ノ之博士まで大人しく見ている。

一体、なんだんだ？

この違和感は何？

「元、どうかしたのか？　なんか気持ち悪そうだぞ？」

「え？　ああ、大丈夫だよ。心配ありがとな、一夏」

多分、気の性だろ。

いつもとギャップが違うグラナドスに驚いてるだけかもしれないしな。

「……………」

それにしてもさっきから織斑先生はずっと篠ノ之博士見ているな。
なんでだろ？
まあ、いいか。



「行ける……行けるけどっ！」

福音さんはウイング型スラスターを巧みに使い、シルバー・ベル銀の鐘始動による爆発散弾を牽制&攻撃に転用してくる。
追い詰めているのに追い詰めきれない。
これじゃ……。

リミット・ブレイク
「具現維持限界が近い、ですね……」

ビットと加速を使いすぎましたか。
ちよつと調子に乗っていたかもしれませんが。
この子のエネルギー効率を考えていませんでした。
引いた方が得策かな？

(正直、攻めきれない。それにこれは実戦。エネルギー切れを起したらそれは死に繋がる。だったら引くしかない。いまのこの距離なら……)

と私はそう頭の中で算段すると同時に福音さんの動きを注視していました。

すこしでも隙がまたできればあの攻撃で本当にエネルギーを持っていけます。

だから……。

引くしかないです！

そう思い、バンデリリエーロ・マタドールを動かそうとすると……。

耳をつんざくようなアラート音が響きだしました。

「え？ ゴスペル 福音からの攻撃アラート？ いや、違う……新たな機影をサーチした？ まさか増援？」

すかさず目線だけを移動させ、軽く福音さんを見ます。

彼女？ もまたその新たな機影が来るべきであろう方向に全身を向けてみていました。

攻撃準備をして。

「敵の増援じゃない？ じゃあ私の方？ ううん、それならアラートなんて鳴らない。いったい何が……」

私はすぐにシステムを起動させ、接近してくる機影の照会を始めます。

——照会完了。新規ISデータ展開。照合データ確認——

私はそのデータを見て言葉を失いました。

ありえないはずの機体が向かってきているのですから。
その機体は……。

「第四世代型試作機式号機……っ!!」
プロトタイプ

く第六話　そしてルミィナは動くーシン・レッド・ラインーく

第六話　そしてルミーナは動くーシン・レッド・ラインー（後書き）

さてさて、どうだったでしょうか？

珍しくルミーナが真面目です。

ちよいちよいふざけていますがW

とりあえず今回は九浄にしては珍しく頭を使って伏線を張ってはみました。

気付かれたら泣きます！

いえ、冗談ですけども。

とりあえず次はシンジさんです。

受け取れっ！

これが俺の……！

“ガンダム”だ……！

はい、またふざけました。

ごめんなさい。

ちなみにこの銀の福音戦後はちょっとしたサプライズを用意しています。

それまではお楽しみに☆

ではまたいずれ。

B y 九浄　夕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1145t/>

IS - インフィニット・ストラトス～Innocent Spica～ -

2011年11月8日00時08分発行